

青森県埋蔵文化財調査報告書 第158集

内真部(4)遺跡

平成5年度

青森県教育委員会

青森県埋蔵文化財調査報告書 第158集

うち　まん　べ
内 真 部 (4) 遺 跡

—緊急地方道整備事業（屏風山・内真部線）に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成 5 年 度

青森県教育委員会



内真部(4)遺跡遠景 〈南東から〉



作業風景 〈東から〉



土器器皿（かわらけ）



青磁・白磁・青白磁・瀬戸美濃ほか



土器器皿・皿・壺（遺構外-7, SX02-4, SE04-4, ST08-1）



珠洲（遺構外-108）



珠洲・その他



SE08-1

序

津軽半島には、旧石器時代から歴史時代に至る多くの埋蔵文化財包蔵地が確認されております。

本報告書は、平成4年度、緊急地方道整備事業（屏風山・内真部線）の実施に先立ち、当該路線内に所在する青森市内真部(4)遺跡の発掘調査を行い、その結果をまとめたものです。

今回の調査によって、本遺跡は主として鎌倉時代から室町時代に主として営まれた集落であることが判明しました。各種遺構の特徴や遺物の内容から、本県の中世を考える上でも数少ない資料を提供する遺跡として注目されます。

調査の成果が、今後、埋蔵文化財の保護、活用に、さらには本県の歴史解明の一助となればと念願しております。

最後になりましたが、調査の実施及び報告書の刊行にあたって、御指導、御協力いただいた関係各位に対して、ここに深く感謝の意を表する次第であります。

平成6年3月

青森県教育委員会

教育長 石川正勝

例　　言

- 1 本報告書は、平成4年度に実施した青森市に所在する内真部(4)遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は、平成4年3月に青森県教育委員会が編集発行した『青森県遺跡地図』に遺跡番号01132として登録されている。
- 3 本報告書の執筆者名は、依頼原稿については文頭に記載し、その他は文末に記してある。
- 4 本遺跡の造構については、以下の記号を使用した。
S B—掘立柱建物跡、S T—竪穴建物跡、S K—土坑、S E—井戸跡、
S D—溝、S F I—焼土造構、S F II—かまと状造構、S X—その他の造構
P i t—柱穴
- 5 挿図の縮尺は、図ごとに示した。なお、遺物写真の縮尺は不統一である。
- 6 各造構の規模については、それぞれの最大値を計測した。
- 7 掘立柱建物跡の主軸方位は、梁行方向・桁行方向の長軸を基準線とした。原則として柱穴については梁行方向をX軸と、桁行方向をY軸とし、それぞれX0 Y0、X1 Y1、…の名称を付した。柱間寸法で、メートル法から曲尺に換算する場合は1尺を30.0cmとした。
- 8 竪穴建物跡の規模については、原則として、4壁の中間点を計測箇所とし、対峙する2壁の各中間点を結ぶ長さを平均壁長とした。主軸方位は、出入り口と考えられる張り出し部の中央線を基準線とした。床面積は、壁の下端で囲まれた範囲(掘り方面積)をプランニメーターを使用して計測し、3回の平均値を用いた。付随する柱穴についてはP1、P2、…の名称を付した。
- 9 資料の確定及び同定、並びに分析については、次の方々に依頼した(順不同、敬称略)。
遺跡周辺の地形と地質　　青森県立板柳高等学校教諭　　山口　義伸

及び石質の鑑定

掘立柱建物跡の建築学的分析

八戸工業大学教授

高島 成樹

陶器の胎土分析

奈良教育大学教授

三辻 利一

出土木製品の年輪年代測定

奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター

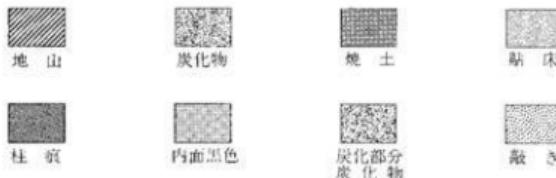
研究指導部主任研究官

光谷 拓実

- 10 本書に記載した地形図（遺跡位置図）は、建設省国土地理院発行の5万分の1の地形図（油川・蟹田）を複写したものである。

- 11 遺構・遺物の文・図中の表現は、原則として次の様式・基準によった。

- (1) 遺構番号は、一部を除いて発掘調査時のものを用いている。
- (2) 遺構内堆積土の注記は、「新版標準土色帖」（小山正忠、竹原秀雄 1987）を用いた。
- (3) 遺物には観察表・計測値を付し、出土地点、及び諸特徴を一覧できるようにした。
- (4) 図中で使用したスクリーン・トーンの表示は、次のとおりである。



- (5) 土器、陶磁器の実測図において、破片から求めた推定復元図は口径を5回以上算出し、その平均値を参考に作成している。しかし、ごく一部の破片から遺物全体の歪についてまでも推定することは不可能であるため、図はおよそのものとしてとらえて頂きたい。なお、推定復元図の場合のみ土器の割れ口面を省略し、また、観察表には残存率を記載した。
- (6) かわらけの写真は、置き方にこだわらず成形技法が判別しやすいように撮影した。
- (4) 陶磁器の年代は廃棄年代ではなくおよその焼造年代を記載してある。

- 12 引用・参考文献については本文末に収めた。文中に引用した文献については、著者名・編集機関と西暦年で示した。

- 13 発掘調査における出土遺物・実測図・写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。

14 発掘調査及び本報告書の作成にあたり、次の諸氏並びに機関から御教示、御指導を受けた
(敬称略、順不同)。

赤平 智尚、福田 友之、半沢 紀、工藤 清泰、宇野 隆夫、加賀 直樹、佐藤 仁、
宇部 則保、松本 建速、羽柴 直人、豊田 宏良、鈴木 徹、伊野 近富、吉岡 康暢
小林 和彦、鈴木 信、井上 雅孝、小島 芳孝、小山 彦造、齊藤 淳、村木 淳、
清水 菜穂、齊藤 豊彦、佐藤 智雄、仙庭 伸久、本堂 寿一

珠州市立珠州焼資料館 富山県埋蔵文化財センター

目 次

序

例 言

目 次

第Ⅰ章 調査に至る経過と調査要項.....	1
第1節 調査に至る経過.....	1
第2節 調査要項.....	2
第Ⅱ章 調査方法と調査の経過.....	3
第1節 調査の方法.....	3
第2節 調査の経過.....	3
第Ⅲ章 遺跡の環境.....	6
第1節 遺跡周辺の地形及び地質について.....	6
第2節 周辺の遺跡.....	12
第3節 内真部(4)遺跡の歴史的環境.....	17
第Ⅳ章 繩文時代の遺物.....	23
第1節 出土遺物.....	23
(1) 土器.....	23
(2) 石器.....	23
第Ⅴ章 検出遺構.....	25
第1節 掘立柱建物跡.....	25
第2節 積穴建物跡.....	34
第3節 土 坑.....	47
第4節 井戸跡.....	53
第5節 焼土遺構・かまど状遺構.....	59

第6節 溝 跡	67
第7節 その他の遺構	72
 第VI章 出土遺物	75
 第VII章 分析と考察	120
第1節 遺跡の立地・検出遺構について	120
第2節 内真部(4)遺跡の掘立柱建物跡	124
第3節 出土遺物について	127
 第VIII章 自然科学的分析	134
第1節 内真部(4)遺跡出土鉄器の金属学的解析	134
第2節 内真部(4)遺跡出土の陶器の蛍光X線分析	139
第3節 年輪年代法による枠材・曲物の内真部(4)遺跡出土年代測定	141
 ◇引用・参考文献	143
 ◇写真図版	147
 ◇報告書抄録	172

第Ⅰ章 調査に至る経過と調査要項

第1節 調査に至る経過

本遺跡は、昭和54年（1969）5月14日に、教育庁文化課の分布調査によって発見されたようである。

県埋蔵文化財包蔵地調査カードによると、内真部(2)～(4)遺跡、前田(6)遺跡と同時に調査されている。これらの遺跡の調査依頼は、県教育委員会教育長宛に県農林部（平成2年9月）と県土木部（平成3年10月11日付け、青道建第267号）からあった。

前記、内真部(2)～(4)遺跡、前田(6)遺跡は、道路付替部分約3,500平方メートル、圃場整備部分は約4,000平方メートルで合計7,500平方メートルと推定されていたので、平成2年6月6日、現地調査が行われた。その結果、圃場整備部分の大半は、現在水田であるため、調査は不必要と考えられたが、これまで遺跡範囲に含めて協議してきた経緯があるため、11月頃に試掘を実施し、調査の要・不要を判断することとなった。

平成2年9月15日（前後）に、農林部（土地改良第二課）から、平成3年度に本遺跡を含めた内真部諸遺跡の発掘調査を実施して欲しい旨の要望が出された。

平成2年10月22日から内真部諸遺跡の試掘調査が開始された。その結果現水田（圃場整備）部分の発掘調査は不要。道路付替部分は、試掘はしていないが発掘調査は必要と判断された。これが教育庁文化課から農林部（土地改良第二課）へ報告されて、農林部から「道路付替部分のみの発掘調査が必要なのであれば、本調査（発掘）は平成4年度でよい。道路付替部分の試掘は平成3年度に行って欲しい。」「内真部諸遺跡の替わりに川内町熊ヶ平遺跡の発掘を（平成3年度）に実施して欲しい。費用については、10月26日まで、各節単位の概算でよい…。」などの協議が行われた。

平成3年10月11日、県土木部長から県教育委員会教育長あてに、「平成4年度道路改良事業の施行に伴う埋蔵文化財の発掘調査について」依頼があった。そして、平成3年10月25日までに事業計画書及び費用の見積書の依頼があって、本遺跡は、平成4年4月20日から発掘調査が実施されることになったのである。

（北林 八洲晴）

第2節 調査要項

1 調査目的	緊急地方道整備事業（屏風山・内真部線）の実施に先立ち、当該地区に所在する内真部(4)遺跡の発掘調査を行い、その記録保存を図り、地域社会の文化財の活用に資する。		
2 調査期間	平成4年4月20日から同年6月30日まで		
3 遺跡名及び所在地	内真部(4)遺跡（青森県遺跡番号 01132） 青森県青森市大字清水字生田76-1、77-3、外		
4 調査面積	1,500平方メートル		
5 調査委託者	青森県土木部道路建設課・農林部農地建設課		
6 調査受託者	青森県教育委員会		
7 調査担当機関	青森県埋蔵文化財調査センター		
8 調査協力機関	青森市教育委員会・東青教育事務所		
9 調査参加者			
調査指導員	村越 潔	弘前大学教授	(考古学)
調査協力員	花田 陽悟	青森市教育委員会教育長	
調査員	高島 成侑	八戸工業大学教授	(建築史)
	市川 金丸	青森県立郷土館学芸課長補佐	(考古学)
	遠藤 正夫	青森市教育委員会社会教育課長補佐	(考古学)
	山口 義伸	青森県立板柳高等学校教諭	(地質学)
	赤沼 英男	岩手県立博物館専門学芸員	(保存科学)
	奈良 昌毅	青森県立青森北高等学校教諭	(考古学)
調査担当者	青森県埋蔵文化財調査センター		
調査第一課	統括主幹		
	課長	北林 八洲晴	
	主事	新岡 巍 (現、主査)	
	主事	下山 信昭	
	主事	木村 高	
調査補助員	齊藤 正宏・成田 和男 今 正子・齊藤 昌		
	(北林 八洲晴)		

第II章 調査方法と調査の経過

第1節 調査の方法

調査区域設定にあたって、道路建設用幅杭No72を基準点（F-35）としNo.70とNo.74を結ぶ南北方向の基準線をFライン、幅杭No.72でこれに直交する東西方向の基準線を35ラインとして4m四方のグリッドを設定した。各グリッド杭の呼称は、中心杭No.69（F-35）を起点として、西へ36、37、38、…、東へ34、33、32、…、の順に算用数字を付し、また南へE、D、北へG、Hの順にアルファベット文字を付して、アルファベットと算用数字との組み合わせで示した。具体的にはそのグリッドの南東隅の基準杭の表示とした。なお、長軸方向はN-46°-Wである。

ベンチ・マークは、調査区域外に設けられていた工事用測量杭から引用し、調査区域内の任意の場所に必要に応じて設定した。

調査にあたっては、34ラインと調査区域西端のF-32、33およびF～G-20に、土層の堆積状況を観察するためのセクションベルトを設け、グリッドごとに掘り進めていった。

遺物の取り上げは、グリッド単位ごとに行い、必要に応じて平面図を作成し、レベルを記録することにした。

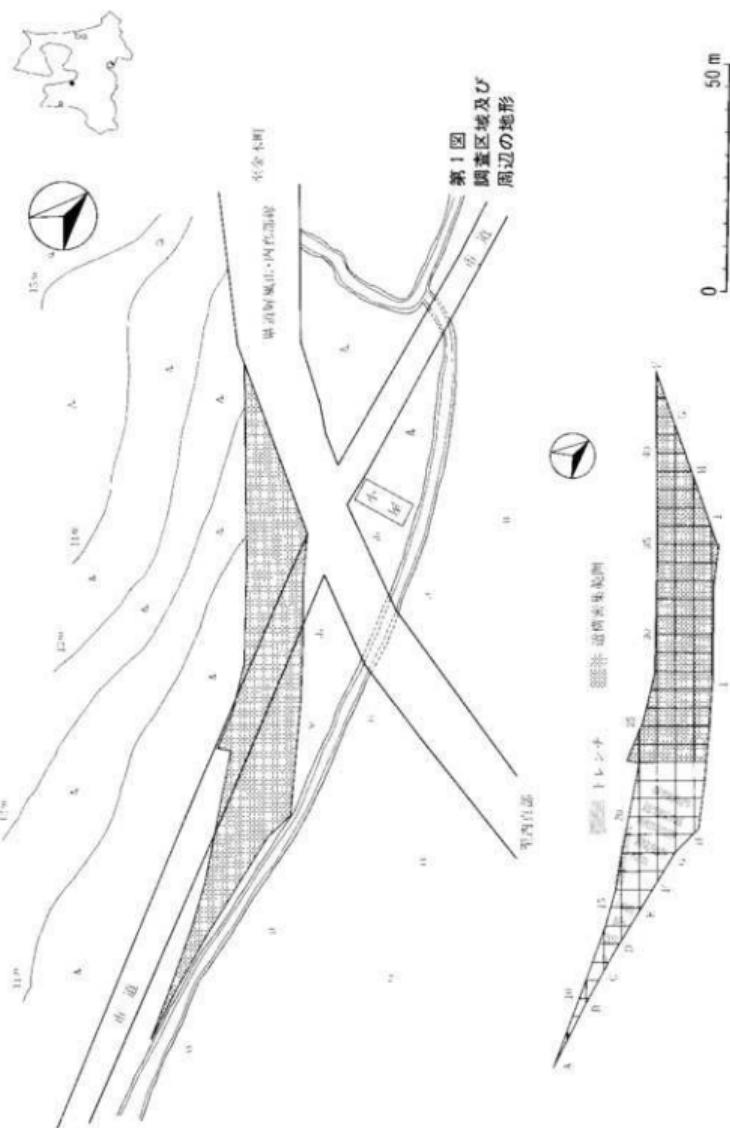
遺構の調査は、原則として二分法・四分法で行い、土層を観察しながら精査を進めたが、井戸跡など崩壊の危険性のある遺構は土層観察用のベルトを設けないものもある。遺構内の出土遺物のうち時代決定のできる遺物については平面図を作成し、レベルを記録したが、それ以外の遺物は一括で取り上げた。遺構の実測の縮尺は、主として20の1を基本とした。遺構の番号は、種類毎ごとに確認順に付することとした。土層の名称は、基本層序については、表土から下位にローマ数字を、遺構内堆積土については上位から下位に算用数字を各々付することにした。土層観察にあたっては、「標準土色帖」を用いて注記した。

写真撮影は、適宜行うこととし、カラーリバーサル及びモノクロームの2種類のフィルムの使用することにした。

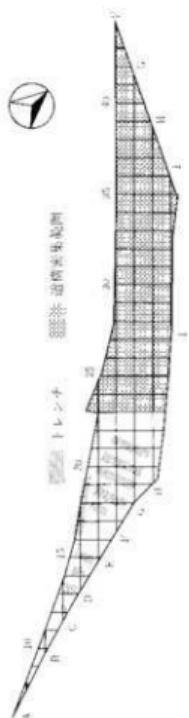
(新岡 嶽)

第2節 調査の経過

平成4年5月15日に発掘作業員の雇用説明会を実施した。17日には発掘調査打合せ会議を青



第1図
調査区地図及び
周辺の地形



第2図 グリッド配置図

森県総合社会教育センターにおいて開催した。会議では本事業の概要及び発掘調査要項の説明と調査方法等について協議し、共通理解を図った。会議終了後、調査現場を調査して今後の調査のあり方等について確認した。

18日に仮設建物を設置し、20日には発掘機材を搬入し、発掘調査を開始した。その日から調査区内の環境整備とグリッド設定を開始し、並行して測量原点（B.M.）の移動を行った。

なお、調査の便宜上、畠地（東側）をI区、山林地（西側）をII区とし、この時点で調査に着手できない市道部分をあわせて3つに区分することとした。

粗掘作業は、I区より着手し、23日からは並行してII区も作業を開始した。調査が進むとともに陶磁器片、土師器、須恵器、鉄塊等が少量出土し、焼土遺構や井戸跡、土坑が検出され始めた。

梅雨に入ると、I区では湧水と雨水のため一層遺構の確認が困難になったため、水中ポンプで水を汲み出しながらの作業となった。II区では木根の除去のために思うように進まなかつたが、5月中旬に重機を投入して対処した。その結果、I区は、湧水がひどく、遺構さほど検出されなかつたため精査を終了し、遺構が多数検出されつつあるII区の精査に全力を注ぐべく努力した。精査が進むにつれ、柱穴が多数検出され、掘立柱建物跡、竪穴建物跡、溝跡、井戸跡、土坑、かまど状遺構等が次々に検出され、足の踏み場もないほどになった。

5月下旬、県文化課より市道部分の下を調査する必要がありとの連絡を受け、仮設建物やトイレを移設した。6月1日より市道の通行止めをし、3日、4日に重機を投入して市道の砂利や碎石等を除去した。この部分を精査していくと、上部は削平されていたが、新たに竪穴建物跡1軒、井戸跡4基、土坑3基、多数の柱穴等が検出された。

また、6月1日より下北郡川内町熊ヶ平遺跡でも調査が開始され、担当、調査補助員の半数はそちらへまわることとなった。

6月中旬になると、精査は一部を除いてほぼ終了し、実測・図化を残すのみとなった。6月22日より当センター職員4名の応援を得て遺構の精査・実測図の作成に全力を注いだ。

6月30日までに精査を完了し、井戸跡等の埋め戻しを行い、調査機材を搬出し、調査の全行程を無事終了した。

(新岡 崑)

第III章 遺跡の環境

第1節 遺跡周辺の地形及び地質について

青森県立板柳高等学校教諭 山口 義伸

内真部(4)遺跡は青森市大字清水字生田に所在し、陸奥湾に面した津軽半島東縁の丘陵地縁辺に発達する低位段丘面に立地している。

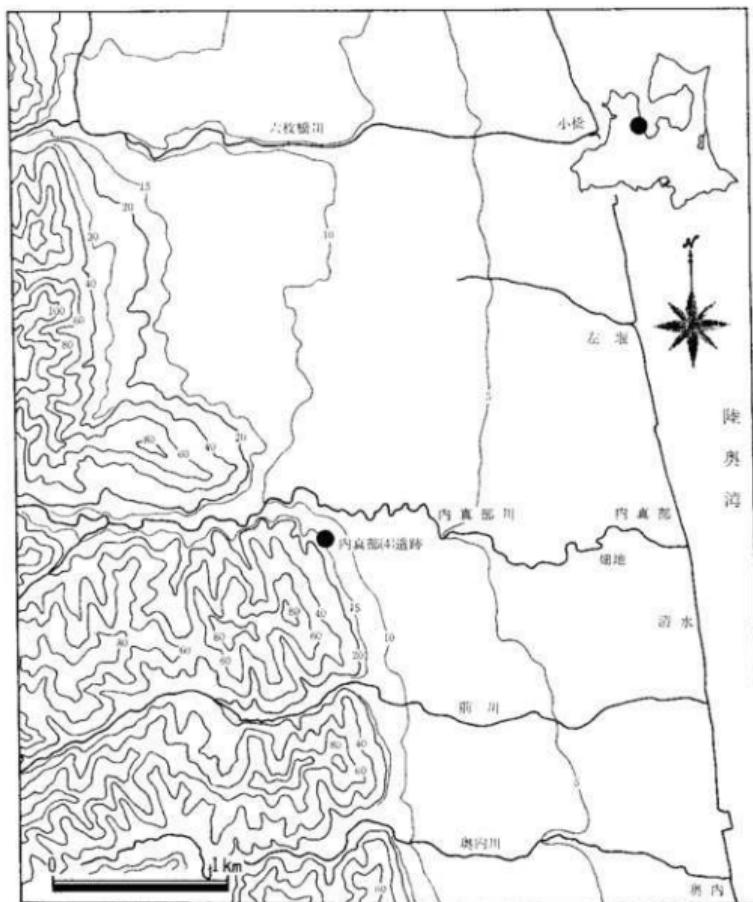
津軽半島のほぼ中央部には袴腰岳（628m）・赤倉岳（560m）・大倉岳（677m）・源八森（353m）・魔ノ岳（460m）・馬ノ神山（549m）などの山稜がほぼ南北に縱走していて、津軽山地（中山山脈とも呼ぶ）を形成している。これらの山稜は開析の進んだ急峻な山容を呈していて、全体的に南下するにつれて標高が下がり起伏量も小さくなる傾向をもつ。

津軽山地は、新第三紀の縄地凝灰岩類及び堆積岩類が広く分布し、東北地方のいわゆるグリーンタフ地域に属している。山地を構成する地層の堆積状況をみると、ほぼ中央部を南北に走る衝上性逆断層の津軽断層を境にして東部の沈降帯、西部の隆起帯に2分される。

東部の沈降帯は砂岩・シルト岩を主とする鮮新世の蟹田層が堆積していて、標高約200m以下の丘陵・台地を構成している。西部の隆起帯はドーム構造で特徴づけられ、北部の袴腰岳ドーム及び南部の馬ノ神山ドームが認められる。中新世の長根層（玄武岩・同質凝灰岩が主体の地層である）・馬ノ神山層（硬質頁岩が主体の地層）・源八森層（黒色頁岩が主体の地層）・不動流層（凝灰岩・シルト岩が主体の地層）などが堆積している。ドーム西翼は緩傾斜し、鮮新世の蟹田層相当の味噌ヶ層が堆積して丘陵・台地を構成している。

津軽山地東縁には、夏泊半島との間に挟まれた湾奥部（青森湾）から北方の阿弥陀川まで2～3kmの幅で臨海沖積平野としての青森平野が陸奥湾岸に沿って発達している。阿弥陀川以北にあっては丘陵地及び台地が海岸線まで張り出しているため平野の幅員が極端に縮小し、また瀬戸子川南部の野木和付近でも幅員が1kmと狭小となっている。青森平野を構成する堆積物は泥炭を挟む砂及び粘土などで、いわゆる後背湿地性の堆積物である。なお、湾岸沿いにはこれに平行する現世の砂堆（砂州・砂堤）が認められ、主な集落が立地している。砂堆の背後の後背湿地においてもこれに平行する小規模の砂堆が断続的ではあるが数列認められる。

この地を流れる河川として、北から蓬田川・阿弥陀川・長科川・後潟川・六枚橋川・内真部川・奥内川・瀬戸子川・天田内川などがある。いずれも津軽山地を源として陸奥湾に向かってほぼ東流する中小河川であって、河口からの距離が短く河床勾配が急である。これら中小河川



第3図 遺跡周辺の等高線図

の平野への出口付近には小規模な扇状地及び三角州が形成されている。なお、北部の阿弥陀川、長科川、後湯川の3河川の下流域には土石流によって供給された泥流地形が認められる。

また、津軽山地東縁には小規模ながら段丘地形も発達し、特に阿弥陀川以北及び瀬戸子川以南では1~2段の海岸段丘が認められる。中川1972は陸奥湾西岸において玉松段丘（中位段丘相当）と郷沢段丘（低位段丘相当）の2段を確認している。玉松段丘は蓬田川から北の蟹田川にかけての海岸沿いによく発達し、標高15~20mのきわめて平坦な面である。下位の郷沢段丘は蓬田川・阿弥陀川及び天田内下流域に扇状地状に発達し、他の諸河川流域においては丘陵地あるいは台地の縁辺部に小規模ながら扇状地状に発達している。

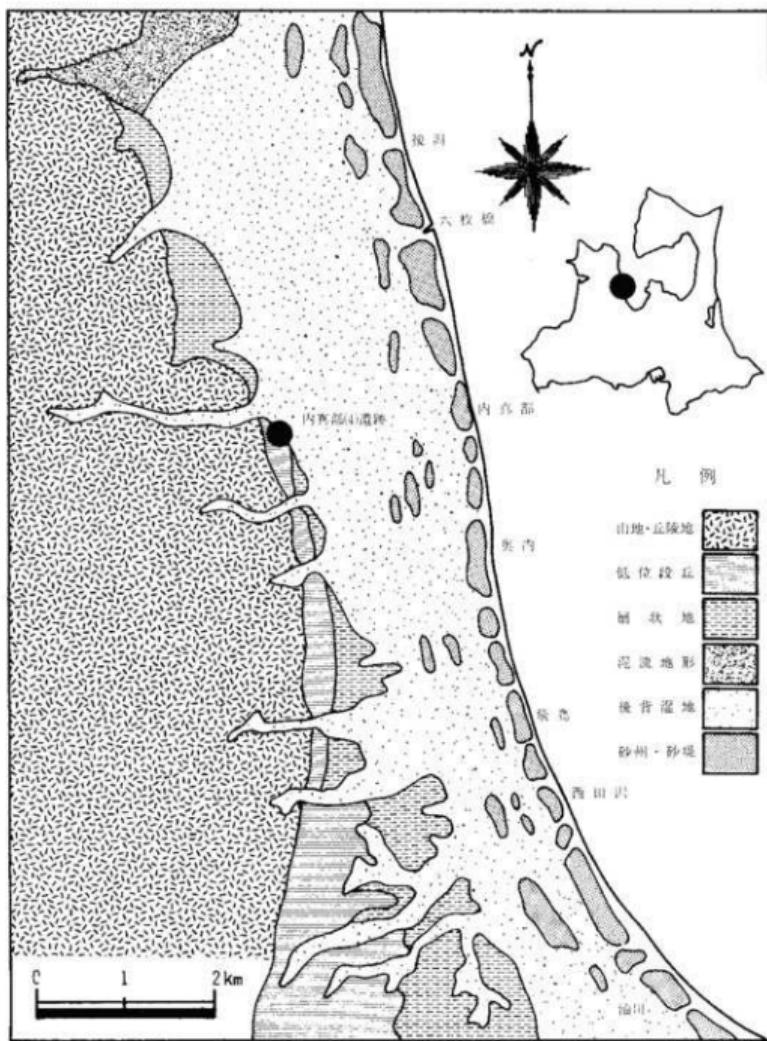
ところで、本遺跡は陸奥湾西岸の内真部川下流域にあって、この河川の丘陵地から平野への出口部分の右岸の位置している。丘陵地東縁に南北に小規模に発達する低位段丘上に立地し、標高9~12mである。低位段丘は東西の幅が狭く平野に向かってやや急傾斜していて湿地性の平野下に埋没している。

図1及び図2によると、山地及び丘陵地部分は標高100m以下の等高線が疎らな間隔ではあるが開析によりやや入り組んだ状況を示している。この傾向はおよそ標高20mまで達し、そして平野部に臨んでいる。ただ、内真部川以北の平野部においては等高線の間隔がやや異なっている。一般に、平野部は標高約10m以下であるが、内真部川~六枚橋川間は標高15mまで、六枚橋川以北は標高20mまで達している。この標高差は内真部川~六枚橋川間では扇状地形の発達により、また六枚橋川以北では扇状地及び泥流地形の発達によるものと思われる。本遺跡周辺では南方において低位段丘前面にわずかに扇状地形が認められる程度である。

最後に、調査区域内のF-32~33で確認した低位段丘を構成する土層区分について述べたい。調査区域を農免道が縱走し低位段丘とこれを被覆する後背湿地との境界にほぼ位置している。農免道の建設により土層の擾乱が認められるが、これを境にして土層の堆積に違いがみられる。なお、鎌倉~室町時代のものと思われる竪穴建物跡及び井戸跡などの検出遺構はすべてこの低位段丘面にて確認されている(図5)。検出遺構のうち、およそ2mの深さをもつ井戸跡は湧水が著しく1日にして満水になる状況であった。

I層 暗褐色土層(10YR3/3・3/4 厚さ約20~30cm) ロームブロックが目立ち、多少固さがあるものの縮まりがなく脆い。本層は道路建設・耕作などによる下位のローム層の盛土と思われる。また、本層は混入するロームブロックの粒径の大きさにより、上位からIa層、Ib層、Ic層の3層に区分される。下位ほどロームブロックの粒径が大きくなる。下位のII層とはシャープな境界面で接している。

II層 黒褐色土層(10YR2/3 厚さ20~40cm) 粘性・湿性があり、固く締まっている。ローム粒及び炭化粒の混入が多少認められる。本層は層相から判断して、IIa層・IIb層



第4図 遺跡周辺の地形分類図

に細分でき、下位のIIb層はやや固さ及び締まりに欠ける。なお、本層は削平等により一次的な堆積状況を示す箇所が少なく検出遺構との関係は把握できなかった。

III層 暗褐色土層 (10YR3/4 厚さ約10cm) ローム層への漸移層である。粘性・湿性があり、やや締まりに欠けソフトな感じである。ローム粒の混入によりIIIa層、IIIb層に2分される。上位のIIIa層はローム粒の混入が目立ち、下位のIIIb層は全体的にロームブロックの混入でローム質であり、色調が明るい。なお、II層までは人為的な擾乱をうけていることから本層上面にて遺構確認を行なった。

IV層 黄褐色ラビリ質浮石層 (10RY5/8 厚さ10~20cm) 繊密かつ堅固である。2~3mm以下のラビリ及び2~10mmの浮石粒を多量に混入している。本層は降下火山灰層で、沖積地を除いて丘陵地及び台地などに広く分布している。本層は低位段丘に載る火山灰層のうち最下部に堆積する特徴的な浮石層である。

V層 明褐色ローム層 (10YR6/8 厚さ20~30cm) 粘土質な降下火山灰である。最上部にクラックの発達する暗色帯 (厚さ5cm) をもつ。なお、第6号井戸跡の壁面で確認したところでは、本層下位には段丘構成層としてのローム質粘土 (VI層・厚さ30~40cm)、赤褐色中~粗粒砂、青灰色粘土などが2m以上も堆積している。

次に、低位段丘面を被覆する後背湿地内の土層区分 (F~G-20) を記述する。なお、20ライン付近は湧水がひどく、低位段丘の覆う火山灰層との接点まで土層確認ができなかった。しかし、20ライン以北では農免道建設時の擾乱層下には明らかに火山灰層が認められる。

1層 黒褐色土 (2.5Y3/1) 耕作土。粘性・湿性がある。やや固く締まる。

2層 黒色土 (2.5Y2/1) 粘性・湿性がある。やや腐植質である。固く締まる。

3層 黒褐色粘土 (10YR2/3) 乾くと、灰褐色に変色し、クラックの発達がみられる。

4層 褐色粘土 (10YR4/6) ローム質粘土である。非常に堅固である。

5層 暗褐色粘土 (10YR3/4)

6層 褐色粘土 (10YR4/4) 乾くと格子状に割れる。

7層 にぶい黄褐色粘土 (10YR4/3) ローム質粘土で、炭化物・小礫が少量混入する。

8層 黒褐色泥炭 (10YR2/2) 砂~小礫が少量混入する。7層との境界部には厚さ1cmの暗褐色 (7.5YR3/4) の酸化帯が認められる。

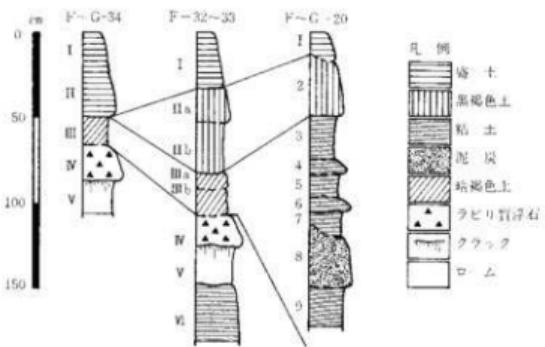
9層 黄褐色粘土 (10YR5/8)

引用・参考文献

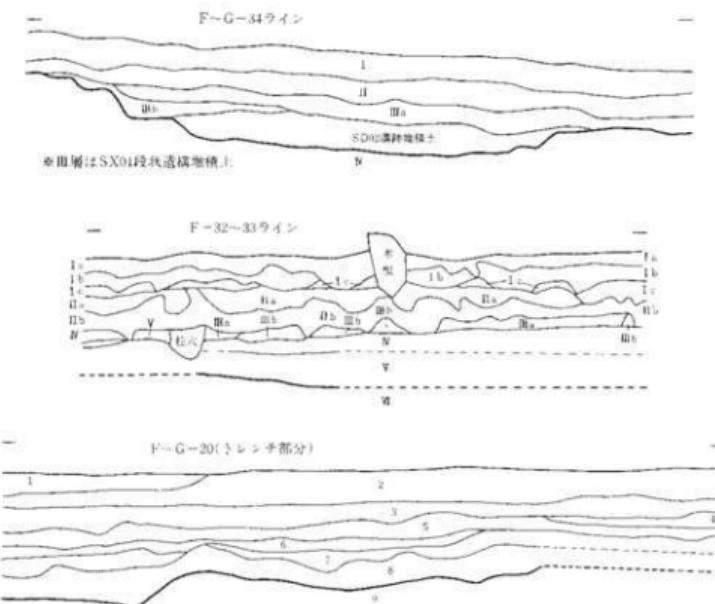
中川久夫 1972 青森県の第四系 青森県の地質 青森県

岩井武彦・川村真一 1984 5万分の1表層地質図「油川」及び同説明書 土地分類基本調査「油川」 青森県

水野 裕・堀田報誠 1984 5万分の1地形分類図「油川」及び同説明書 土地分類基本調査「油川」 青森県



第5図 遺構内の土層区分



第6図 遺跡内基本層序

第2節 周辺の遺跡（第7図、第1表）

1994年3月現在確認されている遺跡数は、青森市が、198箇所、蓬田村が21箇所、蟹田町が18箇所である。このうち、本遺跡周辺に所在する多数の遺跡は、津軽半島の東側、中山山脈が平野部に接していく、標高10m～30m前後の低丘陵上および台地上に位置している。

以下に、古代・中世に時期をしづつて各遺跡の概要を述べていくことにするが、報告や発掘調査のなされた遺跡はごくわずかで、情報量は多くない。

①尻八館（第7図、第1表-1）

青森市の西北3km、後潟川と六枚橋川に挟まれた標高180mの丘陵の頂部に位置する。1977年より3ヶ年にわたり、尻八館調査委員会により調査された。遺構は、二つの郭、堀や竪濠、建物遺構、竪穴状遺構、土橋、腰郭などが検出された。遺物は、船載陶磁器（青磁・白磁・染付・鉄釉陶磁・高麗青磁など）、国産陶磁器（古瀬戸・珠洲系・越前系など）、鉄製品（鍋・鎧金・槍身・鎧・小札など）、青銅製品（笄・盤脚・權など）、古錢、茶臼、硯、黒漆塗漆器などがある。館の存続時期は、これらの出土遺物から14～15世紀としている。

②山城遺跡（第7図、第1表-3）

尻八館遺跡の東1.5km、標高30mの台地に立地している。1973年に分布調査がなされた。鐵滓や礪口に鐵滓が付着しているものがあり、付近に製鐵跡があると推定している。

③油川城跡（第7図、第1表-5）

油川の北西約2km、標高25mの丘陵先端部に位置する。1973年に分布調査がなされ、住居跡が検出され、土製支脚、土師器、須恵器が出土している。なお、青森北高等学校には本遺跡出土の擦文土器の完形品が保管されているという。1981年、尻八館調査委員会により踏査がなされた。遺構は、三つの郭、二重の濠、土壘、土橋、段築が確認されている。遺物は、青磁碗の高台付破片や国産の染付破片などがある。1983年の中世城館調査では、広大なI郭（東西145m、南北290m）を含む四つの郭、堀、土橋状の高まりが確認されている。

1983年、中村和彦氏により出土資料の報告がなされた。船載陶磁器（青磁の皿・鉢・中国製と思われる染付・朝鮮の三島手）、国産陶磁器（美濃灰釉・天目・越前・瓦器）、大中通宝（明鉄）、寛永通宝、鉄製品（鍋2点・舟釘1点）、石製品（茶臼一下臼で数条の刻線あり、砥石-6面の使用面あり）等が発見された。遺物の年代は15～16世紀としている。

④西田沢(1)遺跡（第7図、第1表-6）

西田沢の西約2.2km、標高約30m台地上に位置する。1973年に分布調査がなされた。竪穴住居跡が4軒検出され、土製支脚や土師器（深鉢、浅鉢、壺等）が出土している。

⑤山辺遺跡（第7図、第1表-7）

飛鳥の西2km、標高10mの畠地に立地している。1973年に分布調査がなされた。「館の畠」と呼ばれる地で、平野部を一望できる高台にあり、自然の要害を思わせる。土師器等が出土しても当然と思われるため付近一帯の精査が必要であるとしている。

⑥前田蝦夷館（第7図、第1表-38）

奥内の西2km、標高約40mの丘陵の末端に位置する。1970年に中世城館の調査がなされた。約40m四方の単郭、二本の堀、二段の帯郭が確認された。

⑦内真部遺跡〔現、内真部(1)遺跡〕（第7図、第1表-8）

本遺跡の北西に隣接し、標高30mほどの丘陵上に位置する。1971年、北林八洲晴氏により報告がなされた。遺物は、擦文土器、土師器（うち、壺3点の底部には粉の圧痕あり）、須恵器、土製支脚、炭化米（約100粒、木製容器と思われる炭化材に密着した形で出土）等が発見されている。また、輪口、鉄製品、多量の鉄滓、鉄滓が付着した輪口も出土したことから製鉄炉の性格が濃厚であるとしている。1973年に分布調査がなされ、土師器、須恵器、擦文土器、土製支脚等が少量発見された。注意すべき遺跡の一つであるとしている。

⑧内真部館（第7図、第1表-54）

奥内の西4km、内真川左岸の丘陵先端に位置する。1981年、尻八館調査委員会により踏査がなされた。標高10mの平坦地と標高84mの丘上に構築された二つの郭、段築、濠、土塁が確認された。遺物は、擦文土器が採集されている。1983年に中世城館調査がなされた。丘上に濠道と土塁をもつ郭、数条の竪濠が確認された。地形を巧みに利用した天然の要害としている。

⑨小館(1)遺跡〔蓬田小館〕（第7図、第1表-56）

蓬田駅の北西1km、標高10mの舌状台地に位置する。1971年より2年にわたり、桜井清彦氏らによって調査がなされた。平安時代の竪穴住居跡、井戸跡、溝跡が検出された。遺物は、擦文土器、土師器、土製支脚、輪の羽口、鉄片、鉄滓、炭化したヒバ材等が出土している。桜井氏は当館址を北海道のチャシとしての性格が強いと推定している。1979年に中世城館の調査が

なされた。二つの郭、濠、土塁が確認された。遺物は、須恵器、擦文土器が採集された。

⑩蓬田大館〔別名、蓬田館・蓬田城・大館城〕(第7図、第1表-57)

郷沢の西800m、標高20mの丘陵先端部に位置する。1981年、尻八館調査委員会により踏査がなされた。二本の濠、段築が確認され、網張りは凡そ30haにも及ぶものと推測している。遺物は、擦文土器、土師器、須恵器、青磁、白磁、古銭、鉄滓等が採集されている。1984年から3ヶ年にわたり、早稲田大学文学部考古学研究室により発掘調査がなされた。遺構は、内外二つの郭、二重の壕、竪穴住居址、土壤、掘立柱址が検出された。遺物は、土師器、擦文土器、須恵器、製塙土器、土製支脚、内耳土器、中性陶磁器、鉄製品、鉄滓等が出土した。土師器・擦文土器を伴う竪穴住居跡群の年代は、11世紀代前後と推定している。

⑪坂元遺跡〔瀬辺地館〕(第7図、第1表-62)

蟹田の西約3km、標高20mの丘陵上に位置する。1971年、北林氏により踏査がなされた。戦後間もなく26軒の竪穴住居跡が確認され、鋸歯状文を施した土師器や土製支脚が発見されていることから擦文土器も含まれていたものと推定している。1981年、尻八館調査委員会により踏査がなされた。別名、「広瀬のチャシ」とも称されて、濠が確認されている。かつては刀剣類が発見されたと言われる。なお、戦前に故小野忠明氏が擦文土器を採集した所でもある。

⑫山本遺跡〔山元館〕(第7図、第1表-64)

蟹田町の西約7km、標高38.6mの丘陵上に位置する。1981年に尻八館調査委員会により踏査がなされ、主郭、土塁、濠が確認された。推定面積は約6千平方メートルである。擦文土器や粗圧痕を有する土師器等が出土する遺跡としても早くから知られている。東側にある南沢の台地からはかなりの量の中国古銭が発見されたという。本遺跡は外ヶ浜と十三漢を結ぶ要衝に構築された重要なものの一つであるとしている。

⑬奥内地区古銭出土(第7図、第1表-67)

出土地点は、奥内の西1km、標高2~5m、三社宮付近である。1991年、青森市教育委員会が整理作業を実施し、報告している。出土した古銭は総数10,432枚、銭種数は57種類。铸造国は中国と日本で、上限が118年、下限が1310年である。宋銭は90%を占め、平安時代中期ごろから鎌倉時代にかけて、わが国に流入してくる渡来銭の主流をなす。古銭の埋蔵推定年代は14世紀の中頃から15世紀にかけてと推定している。

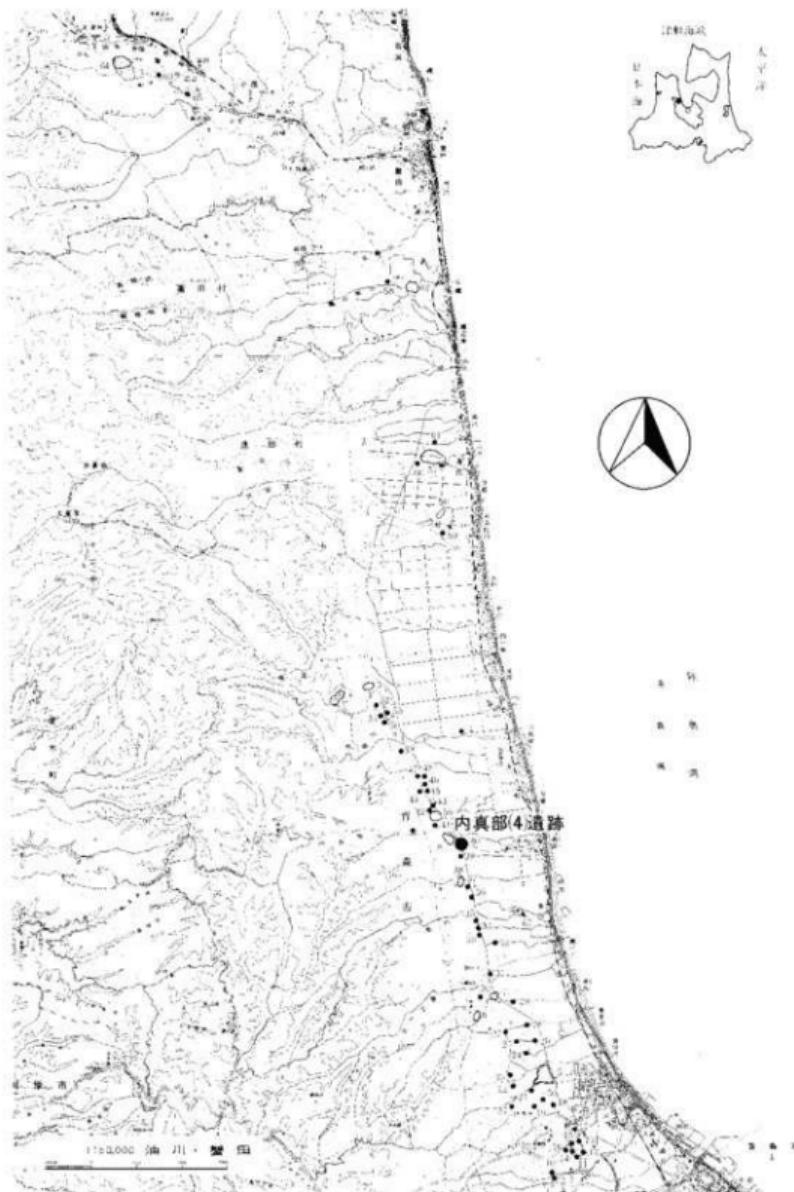
(新岡 崑)

第1表 周辺の遺跡地名表

青森市						
No	遺跡名	所在地	文献番号・備考			
1	尻八越	西田沢川・林野原	1,2,3,14,17,18 遺跡	38 前山脇尖館	納字平野子野	鉛跡
2	大利支磯(1)	内真部字山下		39 内真部(2)	前田字湯ノ沢	6
3	山城	後潟字後潟山	1	40 内真部(4)	清水字生田	6 ★★本道跡★★
4	不渡知	六枚橋字不渡知	1	41 内真部(5)	内真部字山下	6
5	油川城跡	西田沢字洪川	1,2,3,4,7,11,16 遺跡	42 内真部(6)	内真部字山下	6
6	西田沢(1)	飛鳥字盛越	1	43 内真部(7)	内真部字山下	6
7	山邊	"	1	44 小橋(1)	左坂字大科	
8	内真部(1)	清水字生田	1,5,6	45 小橋(2)	左坂字人科	
9	岡町(2)	新城字大田内		46 小橋(3)	左坂字大科	
10	岡町(3)	"		47 小橋(4)	六枚橋字山越	
11	岡町(4)	岡町字宮本		48 小橋(5)	小橋字福田	
12	岡町(5)	東庄字新井・半田		49 小橋(6)	六枚橋字山越	
13	岡町(6)	"		50 後潟(2)	六枚橋字六枚森山	
14	岡町(7)	羽白字野木和		51 後潟(3)	"	
15	岡町(8)	"		52 後潟(4)	"	
16	岡町(9)	岡町字宮本		53 後潟(5)	"	
17	野木和(3)	羽白字野木和		54 内真部(6)	左坂字野田	2,14,15,18,19,27的跡
18	野木和(8)	"		55 羽白(沢川)(1)	羽白字沢田	
19	野木和(9)	"		56 古謫出土地点	奥内二社宮付近	2 古錢10,432枚出土
20	野木和(10)	"				
21	西田沢(2)	西田沢字山辺				
22	西田沢(3)	"				
23	西田沢(5)	"				
24	夏井田(1)	内田字新井・半田				
25	夏井田(4)	西田沢字沖津				
26	夏井田(5)	"				
27	夏井田(8)	岡町字新井・野子地				
28	夏井田(9)	"				
29	飛鳥(2)	飛鳥字須越・字岸田				
30	飛鳥(4)	飛鳥字山田				
31	鶴戸子(2)	鶴戸子字新井・半田				
32	前山(2)	馬内字半田				
33	前田(3)	"				
34	前田(4)	"				
35	前田(5)	"				
36	前田(6)	"				
37	前田(7)	"				

蓬田村						
No	遺跡名	所在地	文献番号・備考			
36	小橋(1)	阿弥陀川字沙干	1,2,3,10,11,18			
57	蓬田入然	蓬田字宮本	1,2,3,12,18 鉛跡			
58	山浦	鶴羽地字田浦				
59	小橋(2)	阿弥陀川字沙干				
60	宮本(1)大館	蓬田字宮本				
61	宮本(2)大館	蓬田字宮本				
62	坂元	庄内字坂元	3,4 濱辺地鉱・鉛跡			

蟹田町						
No	遺跡名	所在地	文献番号・備考			
63	上小国	小国字前下				
64	山本	山本字野脇	3 鉛跡			
65	南沢	南沢字越下				
66	根深山館	山田字根東小河山	2 鉛跡			



第7図 周辺の遺跡

第3節 内真部(4)遺跡の歴史的環境

内真部(4)遺跡は、津軽半島を縦走する中山山脈の東縁、内真部川の南の丘陵末端に位置している。標高は9~12m前後、東側は海岸平野を利用した水田が開け、約1.5km程で陸奥湾に達する。西側は中山山脈から連なる大森林が覆っている。遺跡からの眺めはとてもよく、南東には八甲田の峰々も美しい。生活するには適した環境にあると言える。

次に、内真部及びその周辺の歴史的環境について若干述べていくことにする。

青森市および東津軽郡の陸奥湾沿岸の一帯は古くは外ヶ浜と呼ばれていた。青森の古名とされる善知鳥村に関連して『夫木集』に次の歌がある。

「みちのくの外ヶ浜なる呼子鳥鳴くなる声はうとうやすかた」

平安時代には、平泉の藤原氏の支配がこの地まで及んでいる。初代清衡の代には、南は白河関から北は外ヶ浜に至る間一町ごとに卒塔婆を建てて理程標としたことや支配した1万余の村に建てたと伝えられているが、県内においてそれを直接に示すものはない。ただし、この頃すでに「奥大道」後に「奥州街道」と称される主要幹線道路が平泉から外ヶ浜まで通じていたことは確かである。このルートを用いて様々な人や物資、文化の交流があったことは想像に難くない。あわせて奥大道終点の油川港や岩木川河口に位置する十三湊あたりの港での日本海交易も当然あったものと思われる。蛇足となるが、NHKの大河ドラマ『炎立つ』によると、安倍氏の時代から北の物産であるラッコやアザラシの皮等を用いており、早くから相当に交易が盛んであったことを思わずにおれない。

考古学的には、掠文化の広がり、陸奥湾沿岸で製塩跡が確認されている。また、内真部遺跡等より炭化米が出土していることから、細長い臨海沖積平野を利用して稲作が行われていたものと思われる。

源頼朝の奥州征伐により奥州藤原氏は滅び、その後、文治5年（1189）大河兼任の乱が起きた。鎌倉からの追討軍との戦いは津軽にも波及し、追われた兼任軍は外ヶ浜に至り防戦につめたという。その地は『吾妻鏡』によれば、

「於外浜與糖部間 有多字末井之梯 以伴山為城廓、兼任引籠之由風聞」

とあり、有多字末井之梯を浅虫と久栗坂の間の善知鳥崎とする説もあるが、詳細はいまだ不明である。

〔鎌倉時代〕

鎌倉幕府の成立により、青森県も幕府の支配下に置かれ、各地に地頭が配置されているが、外ヶ浜についてはよくわからない。ここで安藤（安東）氏についてふれるのは本稿の目的では

ない。しかし、本県の中世史上、謎が極めて多い安藤氏の存在を無視することもできない。

奥州藤原氏征伐の際、安藤氏は源頼朝方についたと言われている。『吾妻鏡』文治5年(1189)の条には「安藤次」を山案内者としたことが記されている。『安藤系図』では「安藤次季信」が津軽守護人となっており、「秋田系図」には堯秀を蝦夷管領とし、その子愛秀の時代に十三へ移ったとみている。『諏訪大明神絵詞』は安藤太を蝦夷管領としたことを記している。『保歴問記』には、

「げんかう二年(1322)の春、奥州にあんどう五郎、又太郎と云うもの有。かれが先祖安藤五郎といふは、東夷の堅めに、義時が代官としてつかはし置きたりしそのすゑなり。」とあり、北条義時が安藤五郎を代官として任命したことを記している。

これらのことから、鎌倉幕府の確立期に安藤氏は頼朝の支配下となり、「津軽守護人」「蝦夷管領」という地位を得て、北条氏が実権を握ると得宗領の管理もして力を伸ばしたものと考えられる。その後、安藤氏は十三湊と藤崎に拠点をおき、西海岸、津軽半島から下北方面、糖部地方にもその勢力は及び、蝦夷地(北海道)を含む日本海交易で莫大な利益をあげていたものと推定される。

鎌倉時代の末期、文保二年(1318)から嘉暦三年(1328)にかけていわゆる「津軽の大乱」が起きている。延文元年(1356)の『諏訪大明神絵詞』には、

「(夷は)根本は曾長もなかりしを、武家其濫吹を鎮護せんために、安藤太と云ふ者を蝦夷管領とす。此は上古安倍氏悪事の高丸と云ける勇士の後胤なり。その子孫に五郎三郎季久、又太郎季長と云は、從父兄弟也。嫡庶相論の事ありて、合戦數年に及間、両人を関東に召て理非を裁決の處、彼等が留守の士卒数千夷賊を催集之。外浜内末部西浜折曾閑城廓を構えて相争ふ。両の城峻険により洪河を隔て、雌雄互に決しかたし。因茲武将大軍を遣て征伐すと云へども、凶徒彌盛にして、討手宇都宮の家人紀清両党的輩多以命を壘。漸深雪の比に及ぬ。貞任追討の昔のごとく年序をや累んと、衆人怖畏をいたす所に、(中略)季長が從人忽に城郭を破却し、甲をぬぎ弓の弦をはずして官軍の陣に降す。三軍万歳して則ち関東に帰りける。」

とある。この乱は、安藤氏一族の忽領家と庶子家の所領相続をめぐる争いであった。解決にあたって内管領長崎高資は双方から賄賂を取ったため裁定が下せず、戦争へと発展した。嘉暦3年に和議が成立して終わったが、幕府は権力と信頼を失う結果となってしまった。『北条九代記』からは、この安藤氏の蝦夷蜂起が鎌倉幕府を揺るがした大事件であること、安藤氏の存在が鎌倉幕府の中で決して小さいものではなかったことがわかる。この時期すでに正中の変が発生しており、元弘3年(1333)、鎌倉幕府は滅亡した。

さて、ここに内真部(内末部)の名が最初に文献に登場する。この外浜内末部城廓が内真部

館を指すものか確定できないが、その位置からみてほぼ間違いないものと言われている。更に、戦場となった洪河については岩木川や平川説の他、折曾の関や板碑の分布から赤石川付近との見方がある。なお、「青森市の歴史」によれば、「内真部川の上流は当時日光も透さぬ大森林であったこと、室町時代の末ごろまで内真部が河港として栄えたことなど結び付けて考えると、内真部川は現在のような川でなく、水量豊かな大きい河川であったのではないかとも思われる。」として、洪河が内真部川である可能性を示唆している。

〔南北朝時代～室町時代〕

建武二年（1335）の北畠国宣（遠野南部文書）に次のように記されている。

（花押）

外浜内摩部郷井米給村々泉田湖方中沢新板佐比内中目等村
被宛行南部又次郎師行同一族等候 可沙汰付之由被仰政所畢
然而同茲彼所 無事之煩 可令沙汰付者 依仰執達如件

建武二年三月十日 大藏権少輔清高奉

尾張弾正左衛門尉殿

同年には南部師行が津軽を巡視しており、内真部（内摩部）や後潟（湖方）等を含む外ヶ浜一帯は、安東氏から次第に南部氏の支配下に移っていく過程がうかがえる。なお、暦応2年（1339）11月1日の「曾我貞光申状写」（遠野南部文書）には、

「去六月安藤四郎以下御敵等 尻八橋打入 依令致合戦」

とあり、この中にある「尻八橋」は、青森市北西部に所在する尻八館に比定され、安藤一族の館とする説もあるが、否定する見解もある。尻八館遺跡からは14～15世紀の船載陶磁器、国産陶磁器等が出土しており、かなりの財力を持った人物の存在が推定される。その人物が安藤氏かどうかは今のところ不明である。

南朝方と北朝方の争いを経て、南部氏は次第に勢力を伸ばした。安藤氏は、南部氏の攻略により15世紀の中頃にはその支配地を追われることとなる。失地回復に努めるが及ばず、北海道や秋田方面に逃れたと言われている。「異聞録」には、

「油川へは南部奥瀬判九郎下り、外ヶ浜の代官となり、其子善九郎船水讀岐なり。」

とある。南部氏が、油川城に奥瀬氏を代官として派遣し、外ヶ浜の要衝をおさえさせたものと思われる。中村和彦氏によれば、15～16世紀の陶磁器が出土することや奥瀬一族の墓石が加賀石であること等から、奥瀬氏が北陸地方との日本海交易で利を得たと推定している。外ヶ浜地域は、鎌倉時代から戦国時代にかけて、日本海航路の終点の港として栄え、近江や北陸の商人たちが移住したと言われている。とりわけ津軽平野を後背地として持つ油川は、陸奥湾の中心港として繁栄し、大浜と呼ばれていた。江戸時代を通じ、津軽藩が保護する青森に対抗して油

川は陸海交通の要衝として栄え、外ヶ浜の経済の中心地としての位置を保ち続けた。

天文年間（16世紀の中頃）に編まれた『津軽中名字』には、当時の津軽地方の支配が、大浦（津軽）、大光寺（南部）、浪岡（北島）三氏の鼎立状態にあったとしている。このうち、津軽平野内陸部・外ヶ浜・上磯地方一帯は北島氏が押さえていたものと考えられる。油川・蓬田・今別などに北島氏と関係の深い城館があり、炳崎慶廣に与えた湖潟（後潟）の港や北島氏ゆかりの寺社が外ヶ浜に点在することからもうかがい知れる。北島氏は安藤氏の旧領地を引き継ぐような形で油川港等を利用して日本海交易をも引き継いだものと思われる。浪岡城跡出土の船載陶器等もこのルートを用いたものと推測できる。

やがて、津軽為信が津軽統一に向けて南部方の諸城や浪岡城の北島氏を攻め滅ぼしていく。

『永禄日記』や『津軽一統志』によれば、

「天正一三年乙酉年（1585）二月二六日夜油川奥瀬善九郎落城仕候。右八大浦殿新城之者共を呼寄申付候所而さわき立させ候故、油川動てん至田名部へ落行候。」

とあり、奥瀬氏およびその支配下にあった蓬田城の蓬田越前（相馬氏）の敗走を伝えている。横内城の堤彈正、荒川や高田の館も落ち、津軽為信は外ヶ浜一帯を平定し、16世紀の末にはほぼ津軽を手中におさめた。『油川町誌』によれば、為信は、安倍牛之助を大庄屋として油川城に置き外ヶ浜支配の任にあたらせた。その後、慶長十二年には、府間氏を外ヶ浜の代官として遣わし油川城に置き、3年後には油川城も他の城砦等とともに破却された。

〔江戸時代〕

江戸時代、正保二年（1645）の津軽知行高之帳には、田舎郡内真辺村の高294.19石とある。

津軽藩は、藩の財政上重要な中山山脈のヒバ林を押さるために上磯一帯に山奉行や山廻衆を配している。内真部にも御山奉行が置かれた時期があり、寛文4年（1664）11月1日の定（津軽家御定書）は内真辺御山奉行に対しその職務を定めている。たぶん内真部川の豊かな水量等を利用して原木を河口まで運んだものと思われる。

1684年の『津軽郷村帳』によれば、田舎庄内真辺村石高519.500とある。貞享4年（1687）の検地帳によれば、村高496.516石、うち田方472.51石、畠方24.001石とある。元禄3年（1690）には後潟組に属し、村位は中である。

天明8年（1788）7月8日、菅江真澄は「外が浜づたい」に、幕府巡見使を迎える準備の道普請をする人々の様を次のように記しており、当地の生活の一端を知る上で興味深い。

「瀬戸子などの浜をくれば、例の道つくる（巡見使を迎えるため）とて、蝦夷人の、木の皮の糸して織なせる阿通志（あつし）てふ衣に纏したるを着、あるいは、この浦の乙女らがをりたる、はなだ（うすい蓝色）の麻布に、背のあたり斗ふときしら糸してあやにぬひものしたる（コギン）を着て、男女さまに入まじり、手ごとにかなべら（金へら）、てんすき

(手録)、たち、かつさびなどをたづさへてむれり。」

松前街道は当時、油川から三厩に至る主要幹線道路である。菅江真澄は瀬戸子を後にして、奥内、前田、清水、内真部、左堰、小橋、六枚橋、後潟と北上している。

享和2年(1802)伊能忠敬の「測量日記」に家数18とある。1834年の『天保郷帳面』によれば津軽郡内真辺村石高399.500とある。

(明治時代)

明治初年の「新撰陸奥国誌」に「家数29軒。土地中等、畠少し、小店あり。」とある。また、内真部川を通り、中山山脈を越えて北津軽郡金木町喜良市に至る道は、

「牛馬通せず壯男は四斗の米俵を負担して往来する処なれば、山峯と云とも絶た難なるに非す。」

とあり、この道は古くからの交通路と考えられる。現在、県道屏風山・内真部線が通り、眺望山自然公園を経て北津軽郡金木町喜良市に至る。乗用車で20分程度で山越えができる。

1886年の『地方行政区画便覧』では東津軽郡内真部村となっている。1889年には同郡奥内村に編入され、1955年町村合併により青森市に編入された。

本遺跡を南北に縦貫する市道は、旧津軽森林鉄道の線路跡である。1909年、青森大林区署油川以北の森林鉄道敷地を買収する。1972年には、津軽森林鉄道が廃止され、その跡地が青森市に譲渡されている。往時は、油川・蟹田・北津軽郡中里町今泉を基点に中山山脈より伐り出した原木等を輸送する大動脈であった。

(新岡 嶽)

第2表 関係文献目録

番号	並行年	編著者名	題名	書名・巻号
1	1973	青森県教育委員会	東北新幹線開通遺跡分布調査報告(津軽半島)	
2	1983	青森県教育委員会	青森県の中世城館	
3	1981	青森県立郷土館	尻八館調査報告書	
4	1969	北林八洲晴 他	青森市の櫛文土器について	北夷古代文化 2
5	1971	北林八洲晴	津軽半島における櫛文土器の新資料	北海道考古学 7
6	1974	北林八洲晴	内真郡遺跡出土の土器	土器式土器集成 1
7	1984	中村和彦	青森市油川城跡から出土した中世資料	考古風土記 9
8	1992	青森県教育委員会	市内出土の古鉄	埋蔵文化財出土遺物調査報告書
9	1971	桜井清彦	連環・青森県小堀遺跡の調査	考古学ジャーナル 62
10	1973	桜井清彦	小堀遺跡	日本考古学年報 24
11	1977	桜井清彦	小堀及び油川城址出土の櫛文土器	考古風土記 2
12	1987	佐井清彦・高池敏夫 編	油田大船遺跡	
13	1992	青森県教育委員会	青森県遺跡地図	
14	1980	盛田稔他	日本城郭大系 2 青森・岩手・秋田	新人物往来社
15	1978	羽船愛三	津軽諸城の研究	みちのく双書第31集
16	1990	西田義藏	油川遺跡	
17	1991	工藤清泰	東北北半の城館 一中世後期における	中世の城と考古学 新人物往来社
18	1982	平凡社	青森県の地名	日本歴史体系 2
19	1989	青春市史編纂委員会	青春市の歴史	青春市
20	1966	片岡邦家木暮一 編	青江真造遊覧記 2 外ヶ浜づたい	東洋文庫68
21	1980	青森県立郷土館	よみがえる奈良・平安時代の青森	
22	1990	佐藤 行	沼沢城 中世城館の復元	沼沢町歴史資料館
23	1987	青森県教育委員会	境岡船遺跡	
24	1990	青森県教育委員会	中崎船遺跡	
25	1993	青森県教育委員会	高野川(2)遺跡	
26	1983	青森県立郷土館	青森県の板碑	
27	1984	青森県立郷土館	闇の民俗 青森県西津軽郡深浦町闇	
28	1984	青春町史編纂委員会	熊ヶ沢町史 第一巻	熊ヶ沢町
29	1990	河原純之編	古代史復元10 古代から中世へ	講談社
30	1986	林謙作編	発掘が語る日本史 1 北海道・東北編	
31	1973	平山久夫	安東氏を中心とした津軽中世史序説	北夷古代文化 3
32	1992	青森県教育委員会	遺跡地名表	青森県道路地図
33	1991	河出書房新社	因説 青森の歴史	

第IV章 繩文時代の遺物

第1節 出土遺物

(1) 土器 (第8図・1~15)

十数点の破片が地表面と第II層から出土した。いずれも表面の摩滅が著しく、口縁部破片は3点のみであり、型式名の特定は困難なものである。よって概略のみを記載するにとどめる。なお、繩文時代の構造は全く検出されていない。

出土土器の分類は、下記のように概区分した。

第I群土器：繩文前期後葉～末の土器

第II群土器：繩文後期の土器

第III群土器：繩文晚期後葉の土器

第IV群土器：時期が特定できない土器

第I群土器：繩文前期後葉～末の土器 (第8図・1~7)

6を除いてすべて繩維を混入する。表面には耕作の際に受けたと思われる傷、擦痕が多く認められる。1は、円筒下層d式にほぼ相当するものであろう。6は繩維の混入が見られないため、中期前葉の可能性もある。7は単軸絡条体R繩文が施されるが、他はすべて単節原体の回転施文による。

第II群土器：繩文後期の土器 (第8図・8~9、11~13)

いずれも単節RL繩文が施文される。11は外底面にも施文される。9は沖附(2)式あるいは弥栄平(2)式にほぼ相当するものであろうか。

第III群土器：繩文晚期後葉の土器 (第8図・15)

外面には2条の横位沈線、内面にも一条の横位沈線が巡る。内面の横位沈線は突起部の縦位沈線と結合する。黒色の焼成である。大洞A式の鉢と思われる。

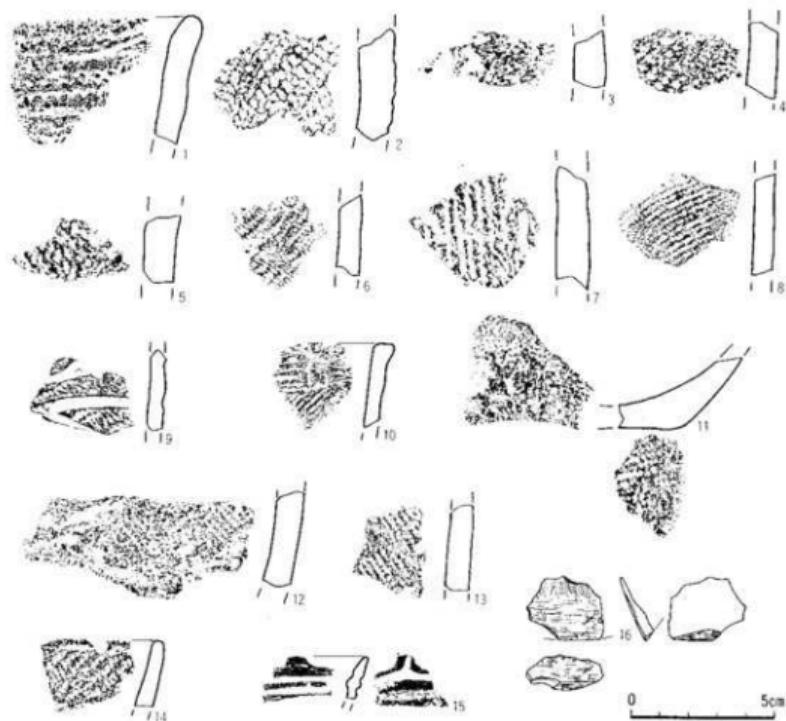
第IV群土器：時期を特定できない土器 (第8図・10、14)

10は、貼瘤が見られることから十腰内IV~V式に相当するものであろうか。14は、口唇部に押圧による窪みが2箇所に施され、2個の低い突起を持ち、細い沈線状の擦痕も見られる。

(2) 石器 (第8図・16)

1点のみ出土した。磨製石斧の刃部破片と思われる。

(木村 高)



No.	地区・遺物名	部位	部 位	外 観 文 横 斜 观 (地文)	内 観 識 想	分類	類	備考	登録番号
1	H-26	I	口縁	横文2条の旋渦状刻文	不明	I	1	施錆注入	3
2	夷田石器	—	鉗	单面LR横文	—	I	1	—	8
3	H	—	刃	不 明	—	I	1	ク	6
4	H	—	刃	单面LR横文	—	I	1	ク	12
5	H	—	刃	不 明	—	I	1	ク	2
6	H	—	刃	单面LR横文	短ミガキ	I	1	—	13
7	H	—	刃	短条状横文	—	I	1	施錆注入	7
8	H	—	刃	粗筋状横文	短ミガキ	II	1	—	10
9	H	—	刃	单面LR横文後、商状文加	—	II	1	—	1
10	F-42	I	刃	不整粒化左縁・點鏽・单面LR横文	短ミガキ	IV	1	—	14
11	SE-07	覆土	表面	外観磨滅著しく不明、内部外観单面LR横文	—	II	1	—	15
12	トレンチ	—	口縁	单面LR横文?	—	II	1	—	11
13	SE-05	覆土	鉗	单面LR(?)横文・摩滅著しい	—	II	1	—	—
14	F-23	I	口縁	しり	—	II	1	—	5
15	夷田石器	—	横粒状縫	—	—	III	1	黑色	4
16	H-24	I	刃部	—	—	—	—	交換	—

第8図 純文時代の遺物

第V章 検出遺構

第1節 掘立柱建物跡

S B01掘立柱建物跡（第9図）

〔位置〕 G・H-36～38に位置する。

〔重複〕 S B02、S B08、S T02と重複する。新旧関係は不明である。

〔規模〕 枠行3間（総長7.73m-東）、梁行2間（総長4.85m-北）の南北棟建物である。建物跡の軸方向はN-32°-Wである。

〔平面形式〕 2間×3間の長方形を呈する。ただし、北東隅の柱穴は調査区域外に延びる。

〔柱穴〕 直径22～40cmの円形の掘り方で、他の柱穴と比較して大型である。深さは30～74cmで東側のX₂列が深い。

〔柱間寸法〕 枠行の平均柱間寸法は2.58m（8尺5寸）、梁行の平均柱間寸法は2.42m（8尺）である。

〔出土遺物〕 なし。

S B02掘立柱建物跡（第9図）

〔位置〕 F・G・H-34～36に位置する。

〔重複〕 S B01、S B08、S F10、S K09と重複する。S B01との新旧関係は不明である。S B08、S F10、S K09より新しい。

〔規模〕 枠行3間（総長7.73m-東）、梁行2間（総長4.56m-北）の南北棟建物である。建物跡の軸方向はN-25°-Wである。

〔平面形式〕 2間×3間の長方形を呈する。

〔柱穴〕 直径は24cm前後で、ほぼ均一の円形の掘り方である。深さは12～57cmで東側X₂列が深い。

〔柱間寸法〕 枠行の平均柱間寸法は2.58m（8尺5寸）、梁行の平均柱間寸法は2.27m（8尺7寸）である。

〔出土遺物〕 磁石、土師器壊片などが出土した。

S B03掘立柱建物跡（第10図）

〔位置〕 F・G-38～40に位置する。

〔重複〕段状遺構、S D01、S T10、S B07、S E07と重複する。S B07、S E07との新旧関係は不明である。S X01 段状遺構、S T10、S D01より新しい。

〔規模〕桁行3間（総長8.18m－東）、梁行2間（総長5.45m－北）の南北棟建物である。ただし、北東隅の柱穴は調査区域外に延びる。建物跡の軸方向はN-41°-Wである。

〔平面形式〕梁行Y₂列で2室に仕切られた単純な構造である。

〔柱穴〕直径20~32cmの楕円形の掘り方である。深さは36~86cmで、他の柱穴と比較して深い。東側は耕作等により削平されたものと思われる。

〔柱間寸法〕桁行の平均柱間寸法は2.73m（9尺）、梁行の平均柱間寸法は2.73m（9尺）である。

〔出土遺物〕なし。

S B04据立柱建物跡（第11図）

〔位置〕F・G-29~33に位置する。

〔重複〕S B05、S T09、S K10と重複する。S B05、S T09よりは古く、S K10よりは新しい。

〔規模〕建物は西側の調査区域外にも延びるため、全体の規模は不明である。検出された部分は桁行5間（総長10.61m－東）、梁行2間（総長6.06m－北）の主屋に、東側に1間四方の突出し部を有する南北建物である。建物跡の軸方向はN-19°-Wである。

〔平面形式〕主屋はX₁列で分割され、更に東側は梁行Y₁列・Y₂列・Y₃列・Y₄列で5分割される。検出部分は突出し部を含めて合計10室で構成される。

〔柱穴〕直径12~24cmの円形の掘り方である。深さは26~66cmで、東側のX列が特に深い。

〔柱間寸法〕桁行X₂通りの柱間寸法は2.58m（8尺5寸）、2.42m（8尺）、1.67（5尺5寸）、2.58m（8尺5寸）、1.52m（5尺）である。梁行の柱間寸法は2.42m（8尺）、2.42（8尺）、3.64m（12尺）である。

〔出土遺物〕なし。

S B05据立柱建物跡（第12図）

〔位置〕F・G・H-29~34に位置する。

〔重複〕S B04、S B06、S T03、S T06、S E04、S D02、S D03、S F03と重複する。S E04よりは古く、他よりは新しい。

〔規模〕建物は西側の調査区域外にも延びるため、全体の規模は不明である。検出された部分は桁行7間（総長16.06m－東）、梁行2間（総長5.45m－北）の南北棟建物である。建物跡

の軸方向はN-22°-Wである。

〔平面形式〕主屋はX₁列で分割され、更に梁行Y₁列・Y₂列・Y₃列・Y₄列で5分割される。検出部分は合計7室で構成される。

〔平面形式〕2間×7間の長方形を呈する。

〔柱穴〕直径12~24cmの円形および方形の掘り方である。深さは12~24cmで、東側X₂列が深い。

〔柱間寸法〕桁行X₂通りの柱間寸法は2.58m(8尺5寸)、2.58m(8尺5寸)、2.42m(8尺)、2.27m(7尺5寸)、1.97m(6尺5寸)、2.27m(7尺5寸)、1.97m(6尺5寸)である。梁行Y₁通りの平均柱間寸法は2.73m(9尺)である。

〔出土遺物〕陶器(壺)の口縁部破片が1点出土した。

S B06掘立柱建物跡（第11図）

〔位置〕F-29~30に位置する。

〔重複〕S B04、S B06、S T04、S F03と重複する。S B04、S B06との新旧関係は不明である。S T04、S F03より新しい。

〔規模〕桁行1間(総長2.27m-東)、梁行1間(総長2.27m-北)の南北棟建物である。建物跡の軸方向はN-26°-Wである。

〔平面形式〕1間四方の正方形を呈する。

〔柱穴〕直径16cm前後と均一な円形の掘り方である。深さは15~52cmで、南側が深い。

〔柱間寸法〕桁行、梁行ともに柱間寸法は2.27m(7尺5寸)である。

〔出土遺物〕なし。

S B07掘立柱建物跡（第10図）

〔位置〕F・G-39~40に位置する。

〔重複〕S B03、S K02と重複する。S B03との新旧関係は不明である。S K02より古い。

〔規模〕建物は西側の調査区域外にも延びるため、全体の規模は不明である。検出された部分は桁行2間(総長5.45m-北)、梁行1間(総長2.73m-東)の南北棟建物である。建物跡の軸方向はN-53°-Wである。

〔平面形式〕東西方向に長い長方形を呈する。

〔柱穴〕直径16~32cmの円形の掘り方である。深さは24~76cmで、他の柱穴より深い。北側は耕作等により削平されたと思われる。

〔柱間寸法〕桁行、梁行ともに平均柱間寸法は2.73m(9尺)である。

〔出土遺物〕なし。

S B08掘立柱建物跡（第13図）

〔位置〕G・H-35～37に位置する。

〔重複〕S B02と重複する。S B02より古い。

〔規模〕建物は東側の調査区域外にも延びるものと思われ、全体の規模は不明である。検出された部分は桁行3間（総長7.12m-東）、梁行1間（総長3.33m-北）に、東南側に1間四方の突出し部を有する南北棟建物である。建物跡の軸方向はN-29°-Wである。

〔平面形式〕検出部分は、東西方向に長い長方形を呈する主屋と突出し部を有するが、明確には断言できない。

〔柱穴〕直径16～42cmの円形の掘り方である。北東隅の柱穴は調査区域外に延びる。また南西隅の柱穴はS K04に切られている。深さは16～76cmで東側X₁列が深い。

〔柱間寸法〕桁行X₁通りの柱間寸法は1.97m（6尺5寸）、2.58m（8尺5寸）、2.58m（8尺5寸）である。梁行Y₀通りの柱間寸法は1.97m（6尺5寸）、3.33m（11尺）である。

〔出土遺物〕なし。

S B09掘立柱建物跡（第13図）

〔位置〕H-33に位置する。

〔重複〕S E04と重複し、同時期の可能性が高い。

〔規模〕桁行1間（総長2.27m）の単純な構造である。

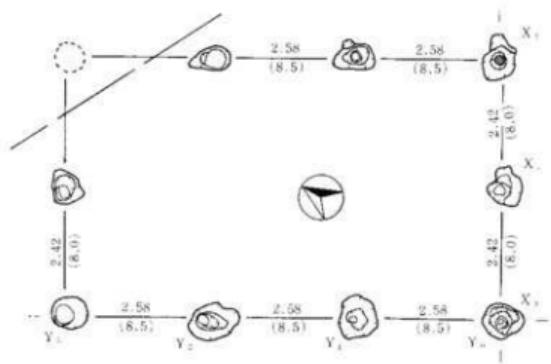
〔平面形式〕S E04の中軸線上に桁行方向が重なり、S E04は上屋構造を持つ可能性が高い。軸方向はN-92°-Wで、ほぼ東西方向である。

〔柱穴〕直径20～22cmの円形の掘り方である。

〔柱間寸法〕桁行方向Y₀～Y₁間の柱間寸法は2.27m（7尺5寸）である。

〔出土遺物〕なし。

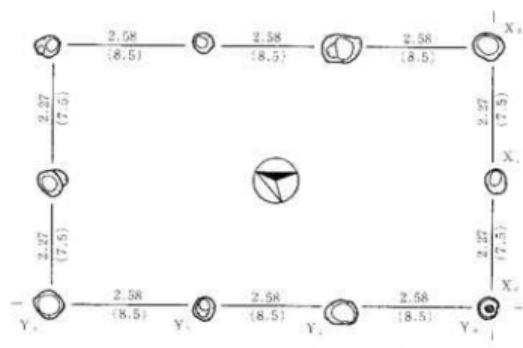
（新岡巖）



SB01 柱穴

柱穴名	柱穴号
X ₁ Y ₁	32
X ₂ Y ₁	30
X ₃ Y ₁	34
X ₄ Y ₁	33
X ₅ Y ₁	38
X ₁ Y ₂	52
X ₂ Y ₂	42
X ₃ Y ₂	74
X ₄ Y ₂	60

SB01掘立柱建物跡



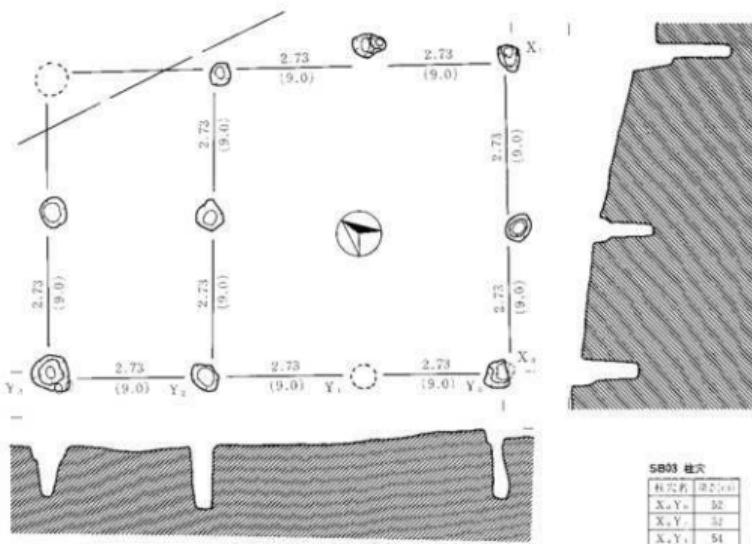
SB02 柱穴

柱穴名	柱穴号
X ₁ Y ₁	36
X ₂ Y ₁	20
X ₃ Y ₁	24
X ₄ Y ₁	12
X ₅ Y ₁	20
X ₁ Y ₂	57
X ₂ Y ₂	28
X ₃ Y ₂	34
X ₄ Y ₂	39
X ₅ Y ₂	23

SB02掘立柱建物跡

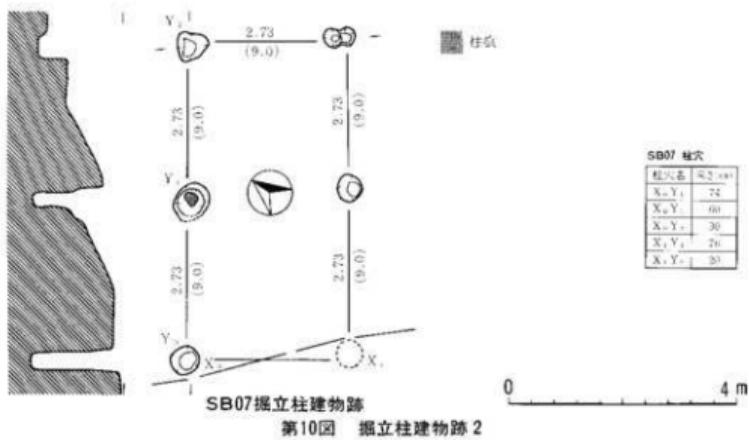


第9図 掘立柱建物跡 1



SB03 振立柱建物跡

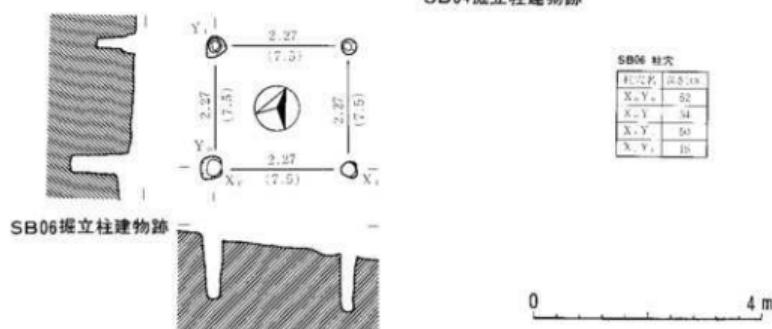
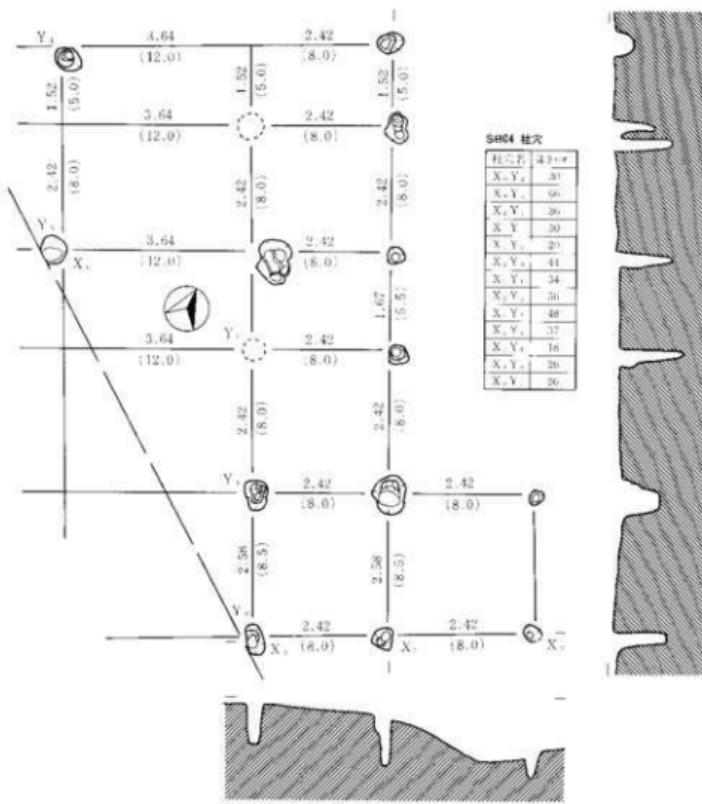
SB03 柱穴	
柱穴名	SB03-1
X ₁ -Y ₁	32
X ₂ -Y ₁	52
X ₃ -Y ₁	54
X ₁ -Y ₂	30
X ₂ -Y ₂	77
X ₃ -Y ₂	67
X ₁ -Y ₃	86
X ₂ -Y ₃	46
X ₃ -Y ₃	36



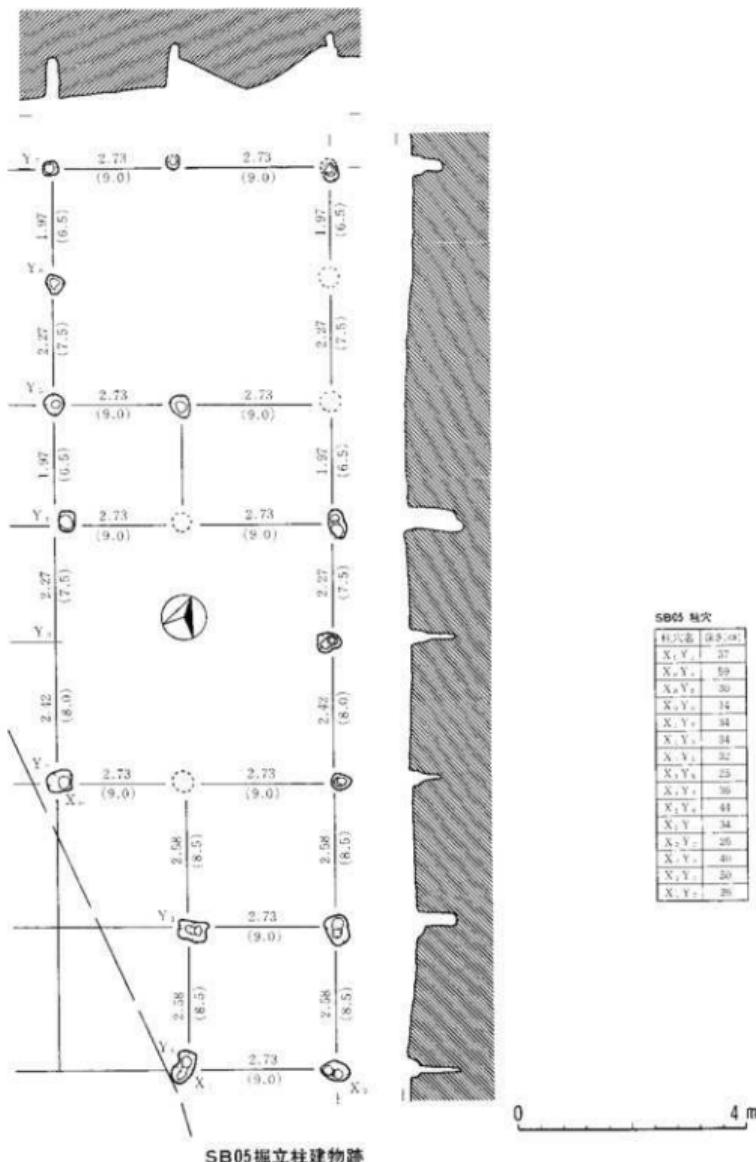
SB07 柱穴	
柱穴名	SB07-1
X ₁ -Y ₁	74
X ₂ -Y ₁	60
X ₃ -Y ₁	30
X ₁ -Y ₂	76
X ₂ -Y ₂	35

SB07 振立柱建物跡
第10図 振立柱建物跡 2

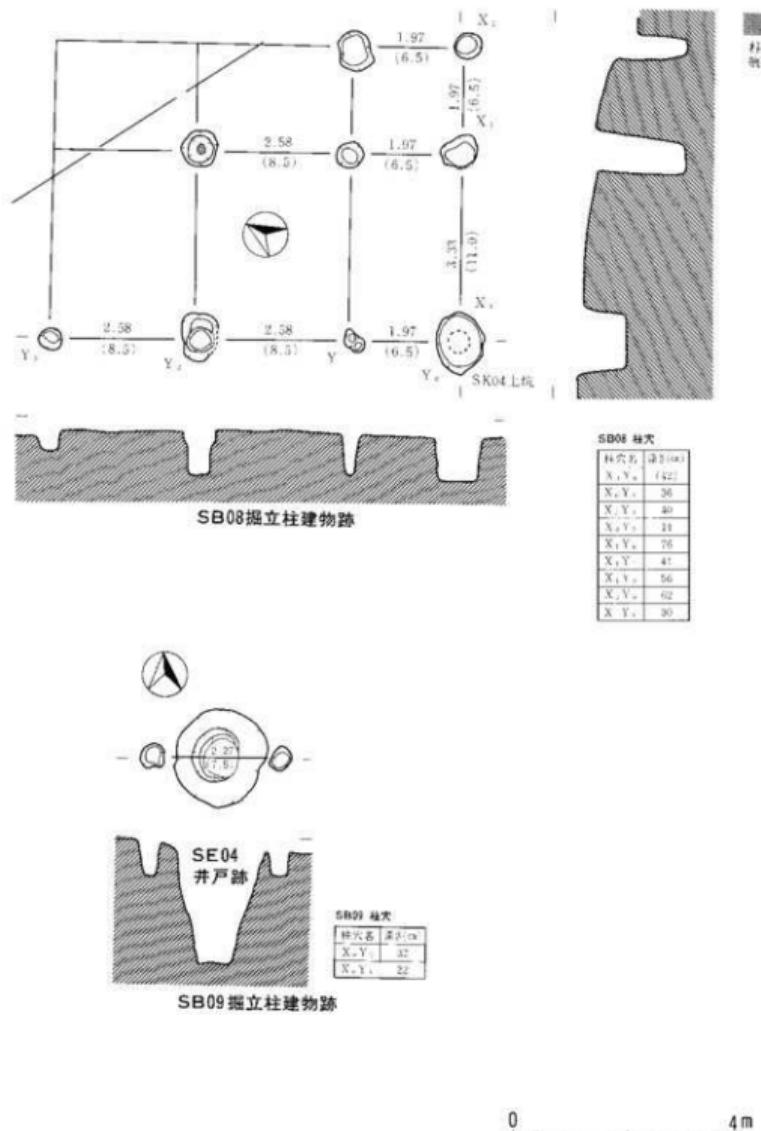
0 4 m



第11図 握立柱建物 3



第12図 挖立柱建物跡 4



第13図 挖立柱建物跡 5

第2節 壇穴建物跡

S T01壇穴建物跡（第14図）

〔位置〕 E-26・27に位置する。

〔重複〕 S T05と重複し、新旧関係はS T05より新しい。

〔平面形〕 調査区域外に延びていることと上部がかなり削平されていることから、全体の規模等は不明である。検出した東壁は3.4m、北壁は(1.0)mを計る。やや不整な長方形を呈するものと思われる。

〔堆積土〕 12層に分層された。上部は木根による擾乱の跡が残る。各層ともロームブロック、炭化物を含む。堆積状況から人為的に埋め戻された可能性が高い。

〔壁・床〕 南壁は床面からゆるやかに直線的に立ち上がる。床面はほぼ平坦である。

〔柱穴〕 4個の柱穴が検出されたが、主柱穴は不明確である。径18~51cm、深さ18~54cm前後である。

〔出土遺物〕 なし。

S T02壇穴建物跡（第15図）

〔位置〕 G・H-38・39に位置する。

〔重複〕 S B01、S B03、S T10、S K17と重複し、S B01との新旧関係は不明である。S T10よりは新しく、S B03、S K17よりは古い。

〔平面形〕 東側は、調査区域外の県道により削平及び擾乱を受けているため、全体の規模は不明である。検出した西壁は(7.8)m、南壁は(0.84)mを計る。やや不整な長方形を呈するものと思われる。

〔堆積土〕 エレベーションのみである。

〔壁・床〕 床面から直線的に立ち上がる。床面は、東側がやや低いがほぼ平坦である。

〔柱穴〕 8個の柱穴が検出された。このうち、P 1・P 2・P 3が主柱穴と思われる。径24~58cm、深さ10~58cm前後である。

〔出土遺物〕 土師器壺・壺破片、土師器皿（かわらけ）破片、擦文土器破片、鉄滓（写真図版参照）、鐵鎌が出土した。

S T03壇穴建物跡（第16図）

〔位置〕 F・G-31・32に位置する。

〔重複〕 S B05、S T09と重複し、新旧関係はS B05、S T09より古い。

〔平面形〕東壁辺は3.24m、南壁は3.92m、西壁は3.36m、北壁は3.90mの方形プランの竪穴である。床面積12.02m²である。軸方向はW-18°-Sである。

〔堆積土〕2層に分層され、各層ともロームブロックを含み、粘土ブロック、炭化物を含むことから、人為的に埋め戻された可能性が高い。

〔壁・床〕床面から外に向かってやや内湾しながら直線的に立ち上がる。床面はほぼ平坦である。

〔柱・穴〕8個の柱穴が検出された。このうち、P1～P6が主柱穴で、径20cm前後、深さ30～54cm前後である。

〔出土遺物〕珠洲壺破片が1点出土した。

S T04竪穴建物跡（第17図）

〔位置〕E・F-29に位置する。

〔重複〕S E08、灰ビットと重複し、新旧関係はS E08より新しく、灰ビットは本遺構に伴う。

〔平面形〕南西隅は、調査区域外に延びる。検出した東壁は2.66m、西壁は(1.70)m、南壁は(1.68)m、北壁は(2.26)mを計る。やや不整な長方形のプランの南壁に0.4mの張り出し部を持つ。

〔堆積土〕7層に分層され各層ともロームブロックを含み、粘土ブロック、炭化物を含むことから、人為的に埋め戻された可能性が高い。

〔壁・床〕床面からやや屈曲して直線的に立ち上がる。床面はほぼ平坦である。S E08は完全に埋め戻され、貼床となっている。灰ビットは竪穴遺構の床面から掘り込んでいる。

〔柱・穴〕竪穴内から8個の柱穴が検出された。このうち、P1～P7が主柱穴で、径20cm前後、深さ30～54cm前後である。西壁辺のP1～P3は深い。

〔出土遺物〕珠洲壺破片、古銭、鐵鎌、粘土塊？、鐵滓（写真図版参照）、羽口？破片が出土した。

S T04内灰ビット（第17図）

平面形は不整な円形で、上端で0.72m×0.65m、下端で0.33m×0.30m、深さ0.24mである。壁は底面からゆるいU字形に内湾しながら立ち上がる。底面は丸底状を呈する。堆積土は7層に分層された。炭化したものと水分を含む生に近いおがくず状の物、焼土粒、シルト、水分を多量に含む。何らかの目的に使用され、徐々に堆積したものと思われる。出土遺物はない。

S T 05 竪穴建物跡（第14図）

- 〔位置〕 E・F-27・28に位置する。
- 〔重複〕 S T 01と重複し、新旧関係は S T 01より古い。
- 〔平面形〕 西側が調査区域外に延びているため、全体の規模は不明である。検出した東壁は3.75m、北壁は(2.30)mを計る。
- 〔堆積土〕 7層に分層され、各層ともロームブロックを含み、粘土ブロック、炭化物を含むことから、人為的に埋め戻された可能性が高い。
- 〔壁・床〕 床面から外に向かってやや内湾しながら直線的に立ち上がる。床面はほぼ平坦である。
- 〔柱・穴〕 竪穴内から8個の柱穴が検出された。主柱穴は不明である。径16～36cm、深さ30cm前後である。
- 〔出土遺物〕 なし。

S T 06 竪穴建物跡（第18図）

- 〔位置〕 G・H・I-31・32に位置する。
- 〔重複〕 S B 05の柱穴と重複し、新旧関係は S B 05より古い。
- 〔平面形〕 調査区域外に延びていることと東側の2/3は市道により上部が50cm程削平されているため、全体の規模は不明である。検出した西壁は(3.24)m、南壁は(5.70)m、北壁は(5.70)mを計る。
- 〔堆積土〕 7層に分層され各層ともロームブロックを含み、粘土ブロック、炭化物を含むことから、人為的に埋め戻された可能性が高い。
- 〔壁・床〕 床面から外に向かってやや内湾しながら直線的に立ち上がる。床面はほぼ平坦である。
- 〔柱・穴〕 竪穴内から8個の柱穴が検出された。この内、P 1～P 4が主柱穴で、径26～40cm、深さ60cm前後である。他の柱穴に比べて深い。
- 〔出土遺物〕 土師器壺破片、土師器甕破片、土師器壺破片、土師器皿（かわらけ）破片、青白磁合子蓋破片、石孔自然石、小石、碁石？、粘土塊？が出土した。

S T 07 竪穴建物跡（第19図）

- 〔位置〕 F-41・42に位置する。
- 〔重複〕 S D 04、S D 05と重複し、新旧関係は S D 05より新しく、S D 04よりは古い。
- 〔平面形〕 竪穴が調査区域外に延びているため、全体の規模は不明である。検出した東壁は(1.

4) m、南壁は(2.70)m、北壁は(2.30)mを計る。

〔堆積土〕1層に分層された。ロームブロックを含み、粘土ブロック、炭化物を含むことから、人為的に埋め戻された可能性が高い。

〔壁・床〕床面から外に向かってやや内湾しながら直線的に立ち上がる。床面はほぼ平坦である。

〔柱穴〕検出されなかった。

〔出土遺物〕なし。

S T08竪穴遺構（第19図）

〔位置〕F-36・37に位置する。

〔重複〕S X01段状遺構と重複し、新旧関係はS X01段状遺構より古い。

〔平面形〕調査区域外に延びているためと遺構の上部が削平されていることから、全体の規模は不明である。検出した南壁は(1.46)m、北壁は(2.9)mを計る。

〔堆積土〕9層に分層され各層ともローム粒、炭化物を含むことから、人為的に埋め戻された可能性が高い。

〔壁・床〕南北壁に長さ1.4m、幅20cm程の周溝を持つ。壁は周溝の底面からやや内湾しながら立ち上がる。床面は凸凹がある。なお、西南隅にかまどらしきものがあったが擾乱を受けていて確認できなかった。

〔柱穴〕33個の柱穴が検出された。P₁～P₉が主柱穴と思われるが不明確である。径10～70cm、深さ20～58cmである。

〔出土遺物〕堆積土中から土師器の壺の完形品が1点出土した。

S T09竪穴遺構（第20図）

〔位置〕F・G-31・32に位置する。

〔重複〕S B05、S T03、S E11と重複し、新旧関係はS B05より古く、S T03、S E11よりは新しい。

〔平面形〕東壁は2.74m、南壁は3.16m、西壁は3.08m、北壁は3.28mの方形プランの竪穴である。床面積は8.81m²で、軸方向はW-20°-Sである。

〔堆積土〕本遺構は上屋が火災を受け、床面上から多量の焼土及び炭化物が検出されたが、その後に埋め戻されている。7層に分層され各層ともロームブロックを含み、粘土ブロック、炭化物を含むことから、人為的に埋め戻された可能性が高い。

〔壁・床〕床面からやや内湾しながら直線的に立ち上がる。床面はほぼ平坦である。

〔柱穴〕 壓穴内から8個の柱穴が検出された。この内、P1～P6が主柱穴で、径24～32cm深さ57cm前後である。東西の壁と平行して走る溝跡が3条検出された。深さは20cm前後である。

〔出土遺物〕 遺構確認面より青磁割花文碗破片、動物骨(写真図版参照)、堆積土中より釘?が出土した。

S T10壓穴遺構(第21図)

〔位置〕 G-39・40に位置する。

〔重複〕 S X01段状遺構、S T02、と重複し、新旧関係はS X01段状遺構、S T02より古い。

〔平面形〕 調査区域外に延びているためと遺構の上部が削平されていることから、全体の規模は不明である。西壁(6.60)mを計る。

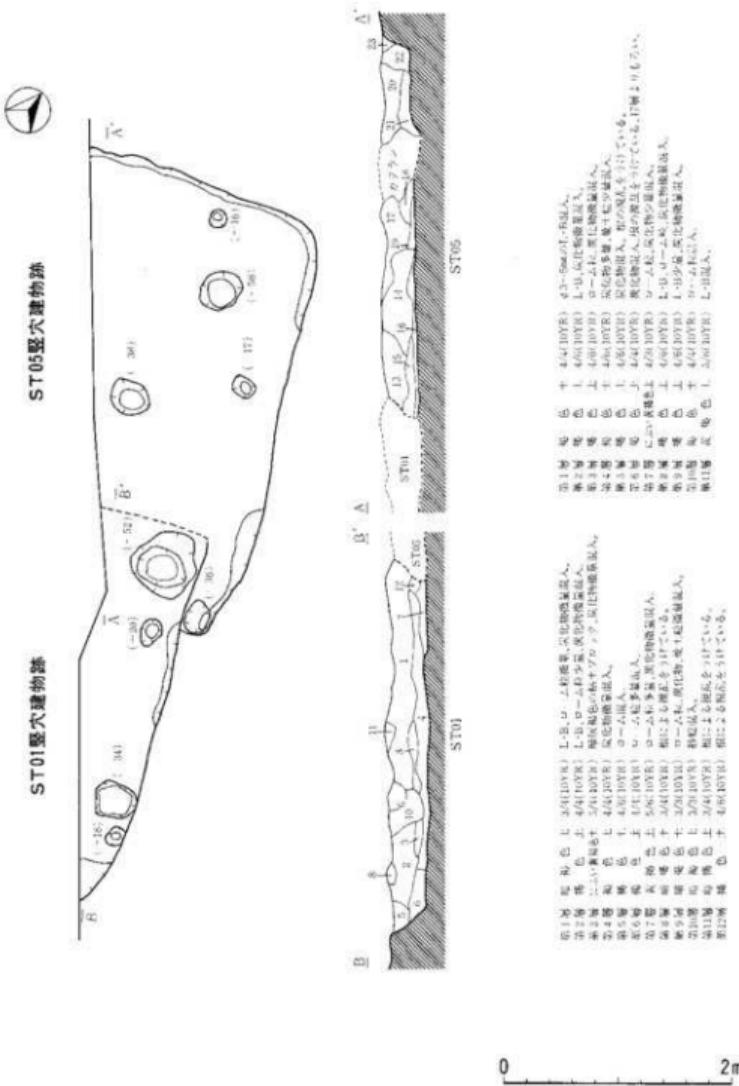
〔堆積土〕 エレベーションのみである。

〔壁・床〕 壁は床面から外に向かって直線的に立ち上がる。床面はほぼ平坦である。西壁と平行な溝(両端に柱穴を伴う)が検出された。溝の深さは6cm前後である。

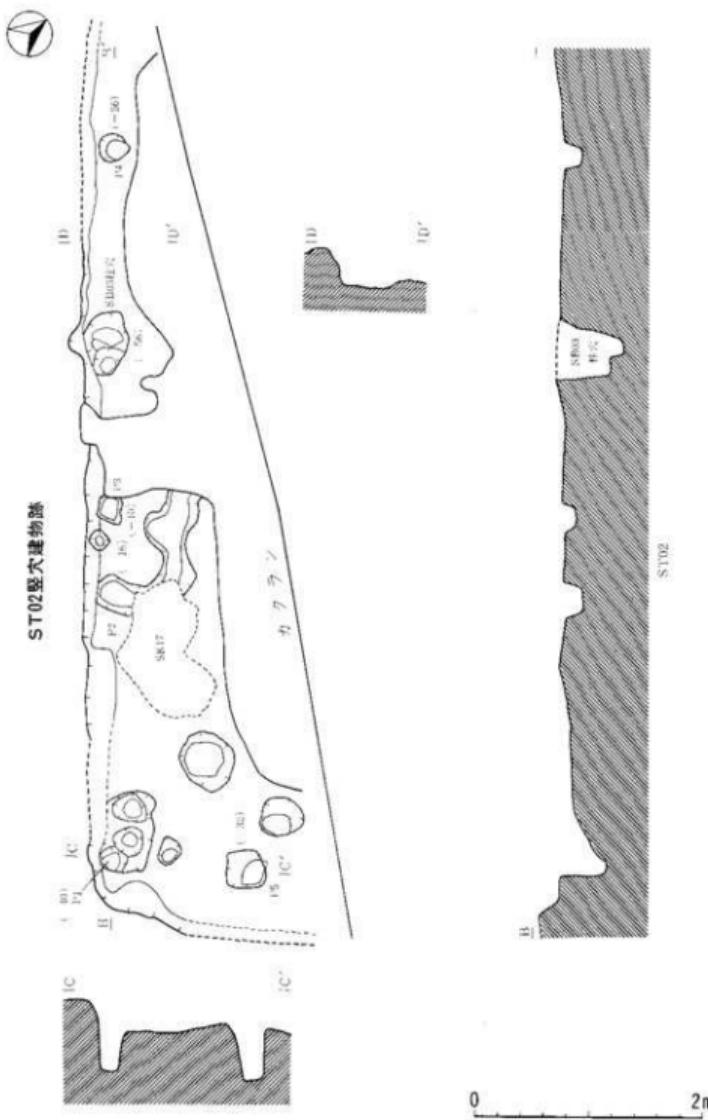
〔柱穴〕 壓穴内から2個の柱穴が検出された。この内、P1・P2が主柱穴で、それぞれ径30、40cm、深さ27cmと44cmである。

〔出土遺物〕 なし。

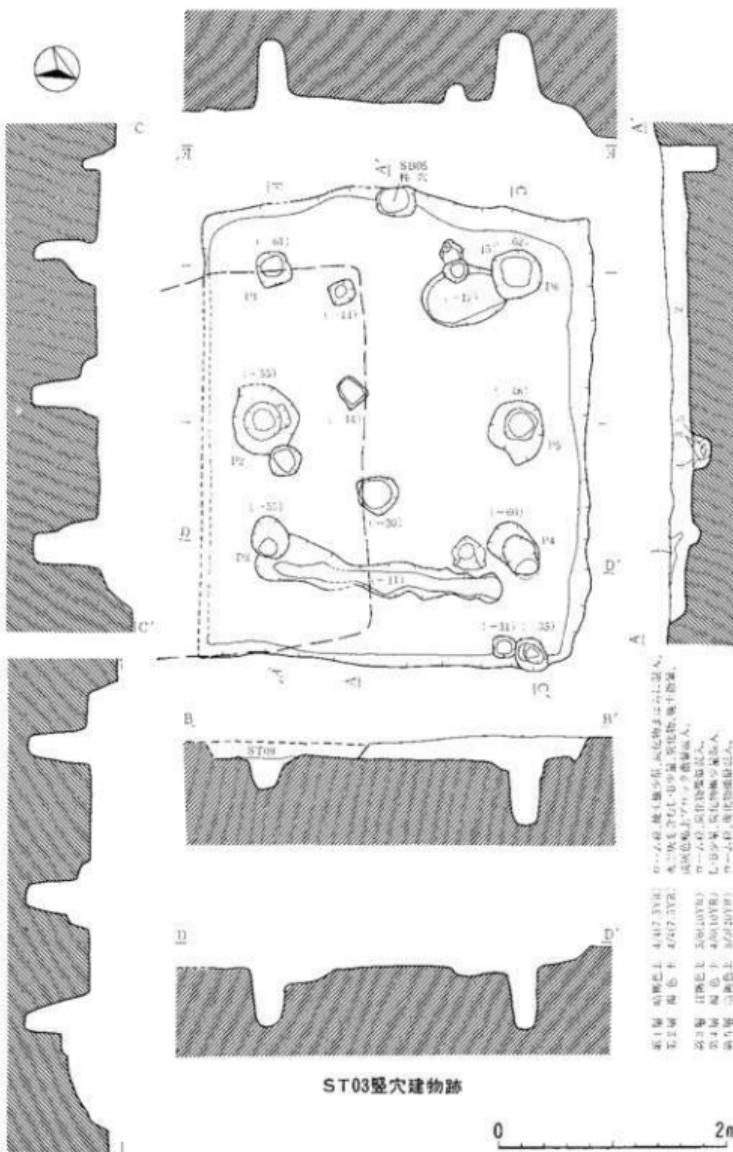
(新岡 嶽)



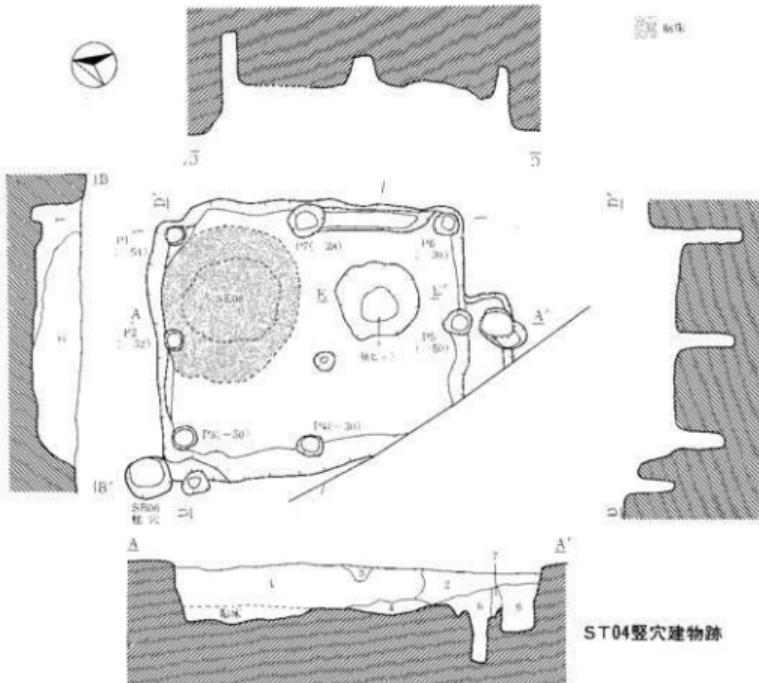
第14図 竪穴建物跡 1



第15図 竪穴建物跡 2



第16図 堅穴建物跡 3

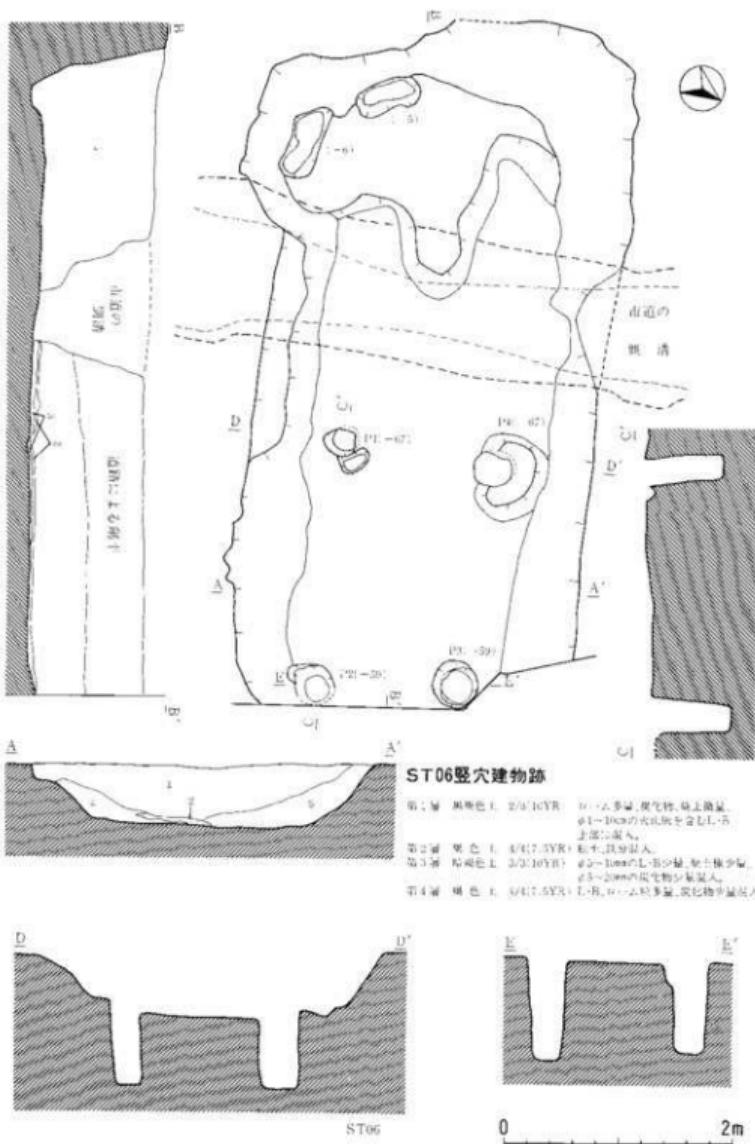


第1層 壁 建 上 4/4(10YR) φ1~50mmのL・柱少量、φ5~30mmの柱上ブローカまたは石に混入。
 第2層 壁 建 中 上 4/6(10YR) φ1~20mmのL・柱少量混入。
 第3層 壁 建 柱上 3/4(10YR) ローム柱少量混入。
 第4層 壁 建 柱上 3/4(10YR) ローム柱少量混入、柱上ブローカ、炭化物・焼墨量混入。
 第5層 壁 建 柱上 3/4(10YR) φ2~15mm柱・柱少量、炭化物・焼墨量混入。
 第6層 壁 建 柱上 3/4(10YR) ローム柱・L・柱少量、炭化物・焼墨量混入。
 第7層 壁 建 柱上 3/4(10YR) φ3~60mm柱・柱少量混入。

第0層 壁 建 上 L-7/3(10YR) わかくす、本炭の炭泥入り。
 第1層 壁 建 柱上 4/2 (10YR) 明前暖色のコーム状混入部入り。
 第2層 壁 建 柱上 6/3 (10YR) 硫酸根混入。
 第3層 壁 建 柱上 4/2 (10YR) 可燃灰色のローム柱・炭墨量混入。
 第4層 壁 建 柱上 6/3 (10YR) 硫酸根混入。
 第5層 壁 建 柱上 1.7/3(10YR) わかくす、本炭の炭泥入り。
 第6層 壁 建 柱上 5/6 (10YR) 壁上部・わかくす、本炭の炭泥入り。

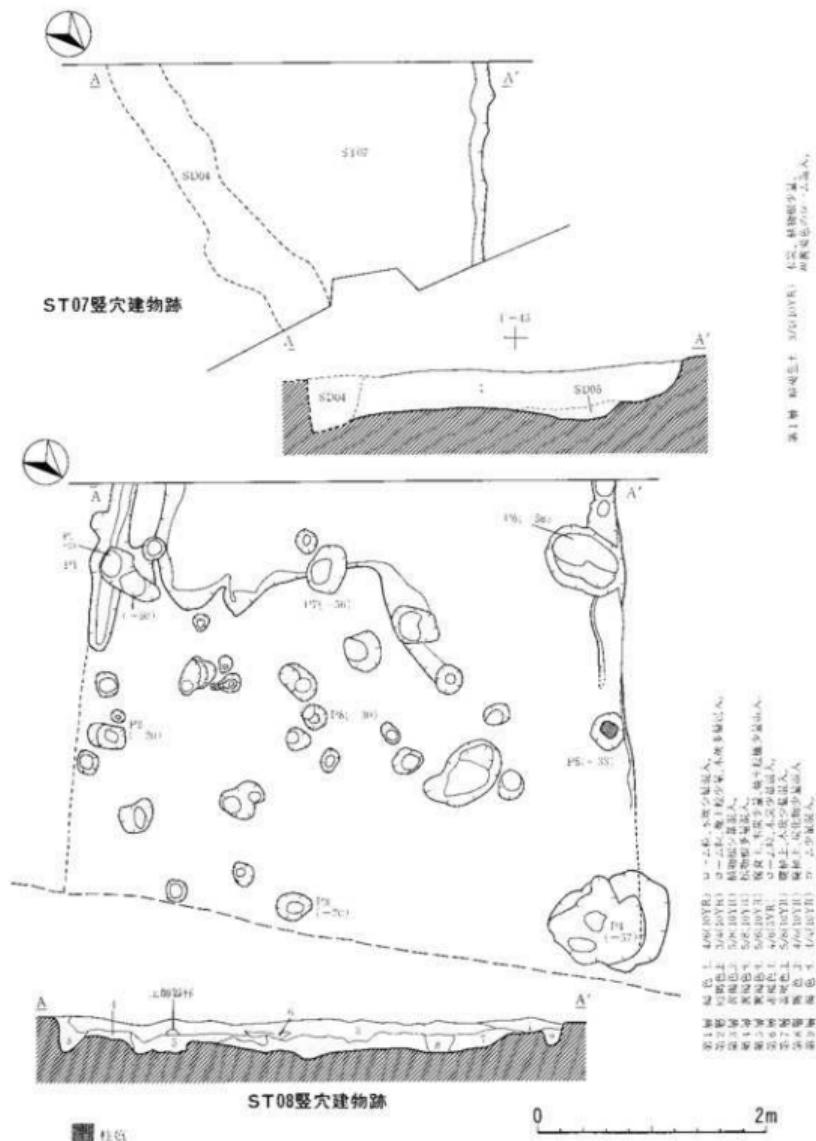


第17図 積穴建物跡 4

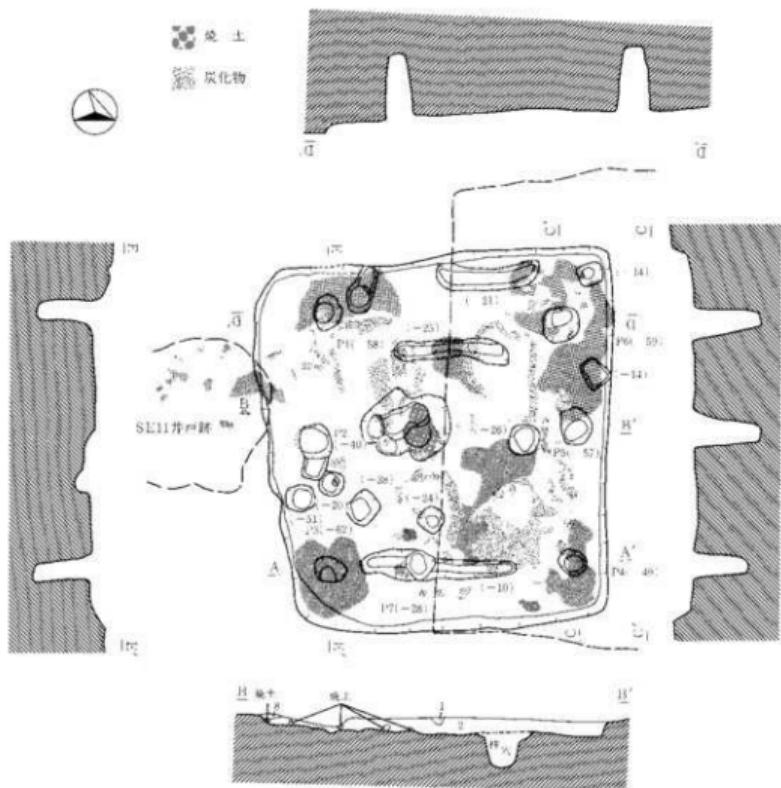


第18図 整穴建物跡 5

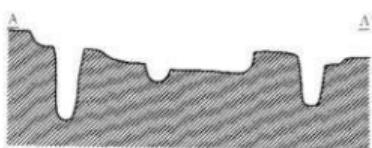
第19図 積穴建物跡 6 (ST07-ST08)



第19図 積穴建物跡 6



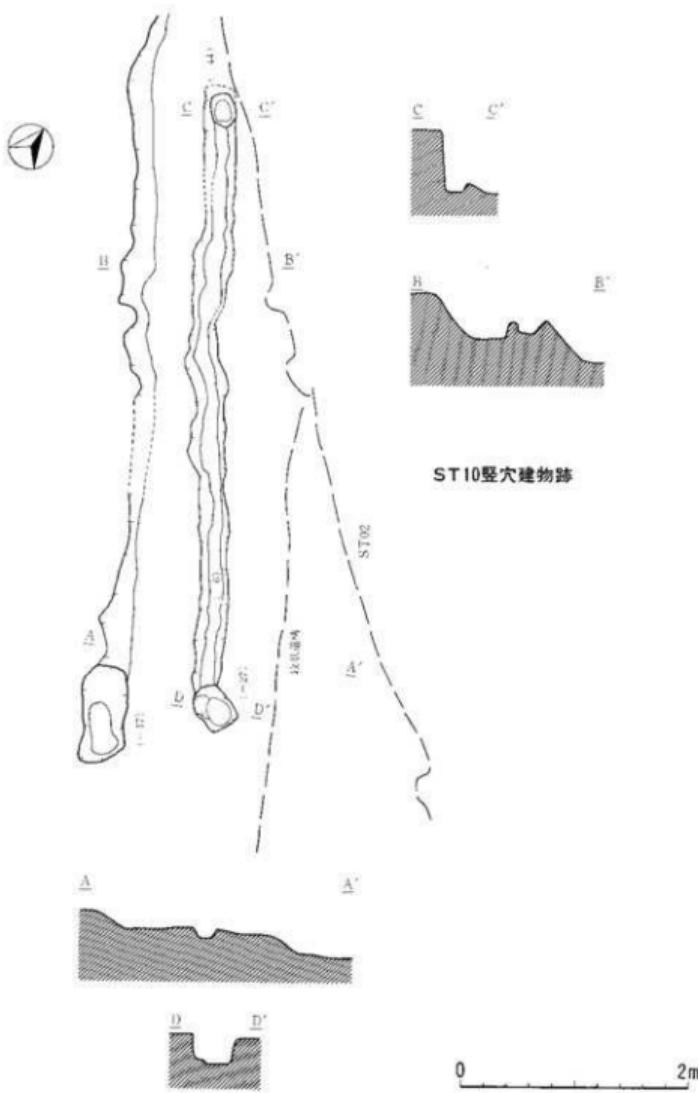
第1層	暗褐色土	3/4(10YR1)	L-有少量, 粉土, 深灰色粘土+微量混入。
第2層	暗褐色土	3/4(10YR1)	A1-20mm的L-粘土+少量沙砾-2, 氧化物少量切入。
第3層	暗褐色土	3/3(10YR1)	L-有, 氧化物少量, 深灰色粘土+多量凹凸。



ST09豎穴建物跡

A horizontal scale bar representing a distance of 2 meters. It features a '0' at the left end and a '2m' at the right end. There are six evenly spaced tick marks along the bar, including the ends.

第20図 穴穴建物跡 7



第21図 竪穴建物跡 8

第3節 土 坑

S K01土坑（第22図）

F-35に位置する。重複はない。平面形は不整な楕円形で、上端で $0.86m \times 0.73m$ 、下端で $0.65m \times 0.62m$ 、深さ $0.27m$ である。壁は底面からゆるやかに湾曲しながら立ち上がる。底面は丸底状を呈する。堆積土は4層に分層された。ローム粒、炭化物を少量混入し、人為的に埋め戻された可能性が高い。堆積土中より土師器の甕破片が2点出土した。

S K02土坑（第22図）

F-40に位置する。S D01、S B07、ピット02と重複し、S D01、ピット02よりは新しいが、S B07よりは古い。平面形は東西に長軸を持つ不整な楕円形で、上端で $0.99m \times 0.83m$ 、下端で $0.74m \times 0.59m$ 、深さ $0.23m$ である。壁は底面からゆるやかに湾曲しながら立ち上がる。底面はほぼ平坦である。堆積土は3層に分層された。ローム粒、炭化物を多量に混入し、人為的に埋め戻された可能性が高い。出土遺物はなし。

S K03土坑（第22図）

F-41に位置する。重複はない。平面形は東西に長軸を持つ方形に近い不整な楕円形で、上端で $1.46m \times 1.16m$ 、下端で $0.74m \times 0.36m$ 、深さ $0.36m$ である。壁は底面からゆるやかに湾曲しながら立ち上がる。底面は丸底状を呈する。堆積土は2層に分層された。ローム粒、炭化物を少量混入し、しまりがないため、人為的に埋め戻されたと思われる。堆積土中より土師器皿（かわらけ）の破片が3点出土した。

S K04土坑（第22図）

G-35に位置する。S B01と重複し、S B01より新しい。平面形は東西に長軸を持つ楕円形で、上端で $0.98m \times 0.86m$ 、下端で $0.88m \times 0.71m$ 、深さ $0.37m$ である。壁は底面からゆるやかに内湾気味に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。堆積土は6層に分層された。ローム粒、炭化物を多量に混入し、人為的に埋め戻されたものと思われる。出土遺物はない。

S K05土坑（第22図）

G・H-36・37に位置する。重複はない。平面形は東西に長軸を持つ不整な楕円形で、上端で $1.73m \times 1.22m$ 、下端で $1.33m \times 0.83m$ 、深さ $0.40m$ である。壁は底面からゆるやかに湾曲しながら立ち上がる。底面は丸底状を呈する。堆積土は5層に分層された。ローム粒、炭化物

を多量に混入し、人為的に埋め戻されたものと思われる。出土遺物はない。

S K06土坑（第23図）

H-37に位置する。重複はない。平面形は東西に長軸を持つ長方形に近い椭円形で、上端で $0.78m \times 0.57m$ 、下端で $0.67m \times 0.54m$ 、深さ $0.31m$ である。壁は底面からゆるやかに内湾して直線的に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。堆積土は4層に分層された。ローム粒、炭化物を多量に混入し、人為的に埋め戻されたものと思われる。出土遺物はない。

S K08土坑（第23図）

G・H-35に位置する。重複はない。平面形は不整な椭円形で、上端で $1.09m \times 0.86m$ 、下端で $0.66m \times 0.52m$ 、深さ $0.32m$ である。壁は底面からゆるやかに内湾気味に立ち上がる。底面は丸底状である。堆積土は3層に分層された。ロームブロック、炭化物を混入し、人為的に埋め戻されたものと思われる。堆積土中より小鉄滓（写真図版参照）が数点出土した。

S K09土坑（第23図）

G-36に位置する。S B02と重複するが、新旧関係は不明である。平面形は南北に長軸をもつ不整な椭円形で、上端で $3.18m \times 1.32m$ 、下端で $2.98m \times 0.96m$ 、深さ $0.32m$ である。壁は、東西が底面から直線的に、南北が階段状に立ち上がる。底面は階段状である。堆積土は2層に分層された。ロームブロックを少量混入し、しまりがないことから人為的に埋め戻された可能性が高い。出土遺物はない。

S K10土坑（第23図）

F-32・33に位置する。S B04と重複し、新旧関係はS B04より古い。平面形は不整な椭円形で、上端で $1.46m \times 1.26m$ 、下端で $1.17m \times 0.71m$ 、深さ $0.47m$ である。壁は底面から直線的に立ち上がる。底面は中央にくぼみを持つが、ほぼ平坦である。堆積土は5層に分層された。ロームブロックを少量混入し、しまりがないことから人為的に埋め戻された可能性が高い。出土遺物はない。

S K12土坑（第24図）

G-26に位置する。重複はない。平面形は不整な椭円形で、上端で $2.00m \times 1.50m$ 、下端で $1.32m \times 0.64m$ 、深さ $0.36m$ である。壁は底面からゆるやかに外反する。底面はほぼ平坦である。堆積土は2層に分層された。ローム粒を少量混入し、しまりがないことから人為的に埋め

戻された可能性が高い。出土遺物はない。時期的には比較的新しいものと思われる。

S K13土坑（第24図）

F-28に位置する。重複はない。平面形は全体の形や規模は不明であるが、検出された部分は不整な橢円形で、上端で(1.40m)×1.38m、下端で(0.24m)×0.96m、深さ0.32mである。壁は底面から直線的に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。堆積土は7層に分層された。ローム粒、炭化物を多量に混入し、人為的に埋め戻された可能性が高い。出土遺物はない。

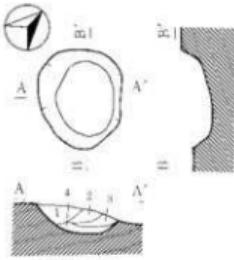
S K16土坑（第24図）

F-38・39に位置する。重複はない。平面形は不整な橢円形で、上端で3.30m×2.00m、下端で2.85m×1.80m、深さ0.55mである。壁は底面からゆるやかに湾曲しながら立ち上がる。底面は凹凸が激しく、東側は一段高い。堆積土は8層に分層された。ローム粒、炭化物、火山灰を少量混入し、人為的に埋め戻された可能性が高い。堆積土中より土師器环・甕破片、羽口？破片、粘板岩や安山岩の自然石（写真図版参照）が出土した。

S K17土坑（第24図）

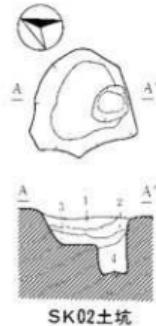
G-38に位置する。S T02と重複し、新旧関係はS T02より新しい。平面形は不整な円形で、上端で0.62m×8.12m、下端で0.28m×0.62m、深さ0.92mである。壁は底面から直線的に外反する。底面は平坦である。堆積土は5層に分層された。ローム粒、炭化物、粘土を混入し、人為的に埋め戻された可能性が高い。出土遺物はない。土坑というよりむしろ柱穴に近いのかかもしれない。

（新岡 巍）



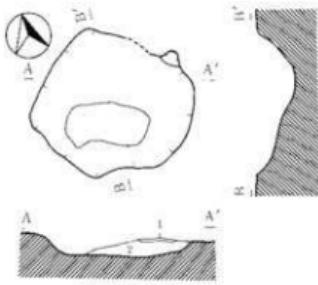
SK01 土坑

第1層 灰褐色土 3/4(10YR) ローム少量混入。
第2層 褐褐色土 3/4(10YR) ムラ少量混入。
第3層 黄褐色土 3/4(10YR) 炭化物少量混入。
第4層 红褐色土 3/4(10YR) ムラ多量混入。



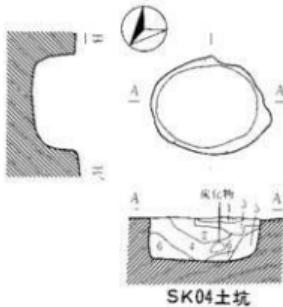
SK02 土坑

第1層 灰褐色土 4/6(10YR) ムラ多量、炭化物多量混入。
第2層 黑褐色土 3/3(10YR) ムラ少量、炭化物多量混入。
第3層 黄褐色土 5/6(10YR) ムラ少量混入。
第4層 黄褐色土 5/6(10YR) ムラ多量混入。



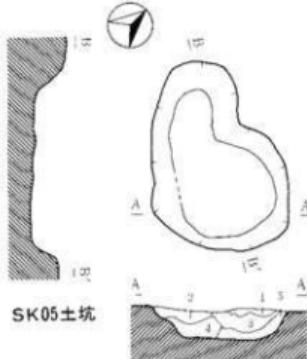
SK03 土坑

第1層 灰褐色土 3/4(10YR) 炭化物少量混入。
第2層 褐色土 4/6(10YR) ムラ少量混入。



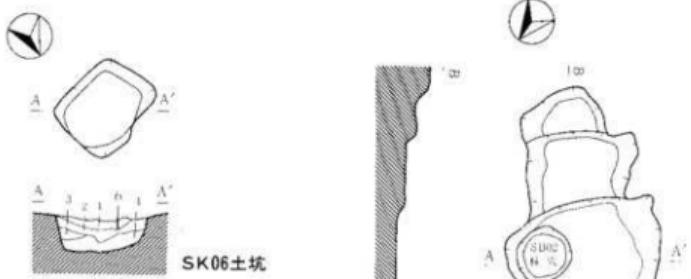
SK04 土坑

第1層 灰褐色土 3/4(10YR) 炭化物少量混入。
第2層 褐色土 4/6(10YR) ムラ多量、炭化物少量混入。
第3層 灰褐色土 3/4(10YR) ムラ少量、炭化物少量混入。
第4層 黄褐色土 3/4(10YR) ムラ少量、炭化物少量混入。
第5層 红褐色土 3/4(10YR) ムラ少量混入。

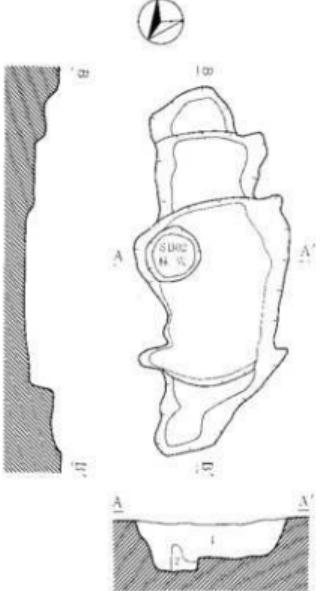


第22図 土坑 1

0 2m



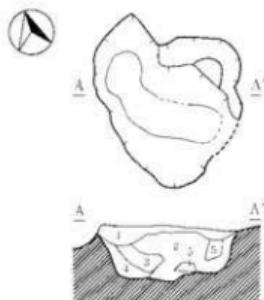
第1層 暗褐色土 4/4(10YR) ローム少量、灰化物、
有機物混入。
第2層 黑褐色土 3/6(10YR) ローム多量、灰化物混入。
第3層 暗褐色土 4/4(10YR) ローム少量、灰化物混入。
第4層 黑褐色土 5/6(10YR) ローム、灰化物多量混入。



第1層 暗褐色土 4/6(10YR) ロームまばらに混入。
第2層 仁立・黄褐色土 1/3(10YR) L・B少量混入。



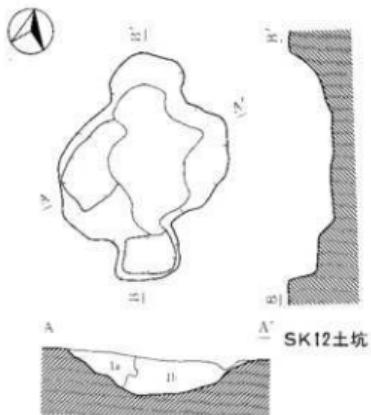
第1層 暗褐色土 4/4(10YR) L・B少量混入。
第2層 暗褐色土 4/4(10YR) ローム少量、灰化物少量混入。
第3層 黑褐色土 5/6(10YR) L・B混入。



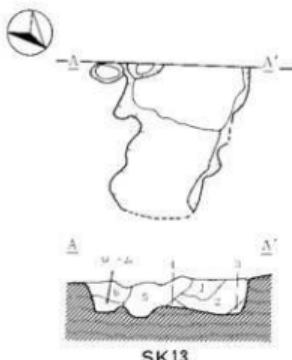
第1層 暗褐色土 4/6(10YR) L・B少量混入。
第2層 黑褐色土 5/6(10YR) 1層の上まばらに混入。
第3層 暗褐色土 4/4(10YR) ローム少量混入。
第4層 黑褐色土 5/6(10YR) 3層の上少量混入。
第5層 黑褐色土 5/6(10YR) L・B混入。

0 2m

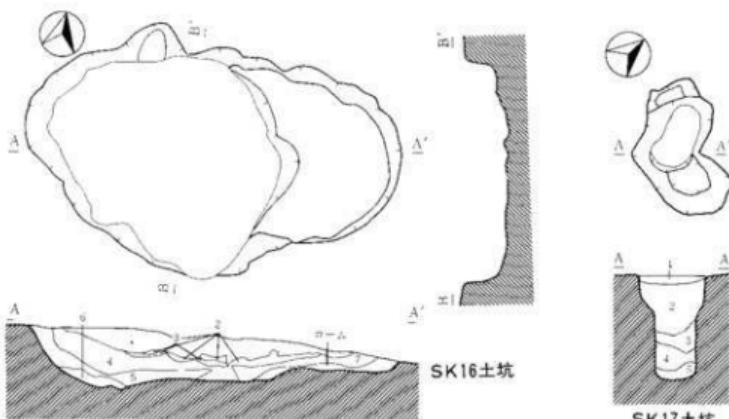
第23図 土 坑 2



土壤質：高鈣魚土，3/6(10YR)；培養色土， $\text{pH}=7.5$ 。



第1番	海色	土	4/40(DYR)H	ローム壁、灰化物+少量泥炭。
第2番	海色	土	4/40(DYR)	ローム、灰化物微量混入。
第3番	海色	土	3/42(DYR)H	ローム、灰化物少量混入。
第4番	實質	土	5/60(DYR)	地山の上アプロック起因。
第5番	シルバーブラウン色	土	4/40(DYR)	灰化物少量混入。
第6番	シルバーブラウン色	土	4/30(DYR)	ローム少額、土起因。



第1番	青色	L-4/4(10YR)	中粒, 淡化物少頭部 有小斑点。
第2番	青色	L-7/4(10YR)	大粒, 黑斑点。
第3番	暗青色	L-3/4(10YR)	淡化物多頭部 有小斑点。
第4番	暗青色	L-3/4(10YR)	淡化物多頭部 有小斑点。
第5番	暗青色	L-3/4(10YR)	淡化物多頭部 有小斑点。
第6番	暗青色	L-3/4(10YR)	L-B少頭部 有小斑点。
第7番	暗青色	L-3/4(10YR)	L-H少頭部 有小斑点。

第1層	褐色	上	4/6(10YR)	L-多量混入。
第2層	褐色	上	4/4(10YR)	N-ム。
				炭化物っぽい混入。
第3層	黃褐色	上	5/6(10YR)	カーボム多量混入。
第4層	褐色	土	4/6(10YR)	ロ-ム混入。
第5層	灰褐色	下	5/2(10YR)	L-少量化入。
				秋千枝。

A horizontal ruler scale marked from 0 to 2 meters. The scale has major tick marks every 2 centimeters and minor tick marks every millimeter. The '0' mark is at the left end, and the '2m' mark is at the right end.

第24図 土 坑 3

第4節 井戸跡

井戸跡は12基検出された。当初は土層観察用ベルトを残して掘り進めた。しかし、堆積土を掘り下げるに従って湧水が激しくなり、堆積土が崩落するなどの危険が多かったため、やむをえず断面（セクション）図はとらなかった。そのため堆積の状況および遺物の出土状態等を明確につかむことはできなかったことをお断りしておく。ただ、遺構精査中の堆積土の観察では人為堆積のもののが多かった。

S E01井戸跡（第25図）

調査区の東南、G-23・24に位置する。重複はない。平面形はほぼ円形で、上端で径0.74m、下端で径0.46m、深さ約0.78mである。壁は底面から直線的に立ち上がる。底面は不整な形状を呈する。出土遺物はない。

S E02井戸跡（第25図）

調査区の東南、G・H-25に位置する。重複はない。平面形はかなり不整な梢円形で、上端で径2.38×1.74m、下端で径0.97×1.12m、深さ約1.05mである。壁は東西と南北では立ち上がり方がちがう。底面は不整な形状を呈する。出土遺物はない。

S E03井戸跡（第25図）

調査区の東南、G-25に位置する。重複はない。平面形はほぼ円形で、上端で径1.38m、下端で径約0.57m、深さ約2.06mである。壁は底面からやや内湾ぎみに立ち上がる。底面はやや不整な丸底状を呈する。堆積土中より炭化材、焼けた木根、人頭大の自然石が出土した。

S E04井戸跡（第25図）

調査区のほぼ中央のやや東寄り、H-33に位置する。上屋構造を伴う可能性が大きい。平面形は、北側にはほぼ円形の張り出しを有し、ほぼ円形で、上端で径1.75m、中端で径0.84m、下端で径0.68m、深さ約2.18mである。壁はほぼ直線的に外反して立ち上がる。底面は平坦である。堆積土中より土師器壺・甕・壺破片、須恵器？、擦文土器破片、鉄滓、砥石？、井戸枠の部材？、表皮の残る自然木、焼痕のある材木、底面から3～5cm浮いて連続山形文の小壺が出土した。

S E05井戸跡（第26図）

調査区の中央やや南より、G-30に位置する。重複はない。平面形はほぼ円形で、上端で径1.37m、下端で径0.57m、深さ約2.03mである。壁はほぼ垂直外反して立ち上がる。底面は丸底状である。堆積土中より珠洲焼の擂鉢の口縁部破片、古銭（皇宋通宝他）、繩文土器片、自然植物遺体、炭化物、粘土塊、磁石、卵形の丸石が出土した。

S E06井戸跡（第26図）

調査区の中央やや南より、G・H-28に位置する。重複はない。平面形は、東側に張り出しへもつ不整な楕円形で、上端で径1.28×1.64m、下端で径0.72m、深さ約2.1mである。壁はほぼ内湾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。堆積土中より下駄、トチ・モモの種？、自然植物遺体、箸、自在鉤状の木製品、曲物の側板、井戸枠の部材？、小石が出土した。

S E07井戸跡（第26図）

調査区の北端、G-40に位置する。S B03掘立柱建物跡と重複し、新旧関係は不明である。ちょうど県道の側溝の下に位置し、崩壊の危険が伴うため、途中で掘り下げを中止して埋め戻した。平面形は不整な楕円形で、上端で径約1.29mである。調査時の所見から壁の上部は直線的に外反する。底面は不明である。堆積土中より土師器の壊破片、甕破片、擦文土器、粘土塊？、鉄滓、繩文土器破片が出土した。

S E08井戸跡（第26図）

調査区の西端、F-29に位置する。S T04竪穴建物跡と重複し、新旧関係は堆積土の上部がS T04の貼床であることからS T04竪穴建物跡より古い。平面形はほぼ円形で、上端で径1.44m、下端で径0.86m、深さ約2.07mである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。堆積土中より珠洲の擂鉢、産地不明の擂鉢、繩文土器破片、覆土より磁石、底面近くより井戸枠と思われる炭化材が出土した。

S E09井戸跡（第26図）

調査区の南より、F・G-28に位置する。重複はない。平面形は上端はやや角張った円形、中端は井戸枠の跡が方形、下端は不整の楕円形を呈する。規模は、上端で径1.53m、中端で径1.05m、下端で径0.52m、深さ約1.8m、井戸枠は約0.77m四方である。壁は2段階に外反し立ち上がる。底面はほぼ丸底状を呈する。堆積土中より珠洲焼壺腹部破片、棒状・板状の木（木製品の一部もしくは井戸枠の一部）、曲物の側板と円板、炭化材、多数の箸、磁石（？）、小石、

礫、自然植物遺体が出土した。市道下より検出されたため、上部は50cmほど削平されたものと思われる。

S E 10井戸跡（第27図）

調査区の南より、H・I-33に位置する。重複はない。平面形は上・中端は不整の方形、下端は不整の梢円形で、上端で径1.18×1.15m、中端で1.2×1.1mの方形、下端で径0.52m、深さ1.48mである。壁は2段階に外反し立ち上がる。底面はほぼ平坦である。遺構の確認面から刀子1点が出土した。市道下より検出されたため、上部は40cmほど削平されたものと思われる。出土遺物はない。

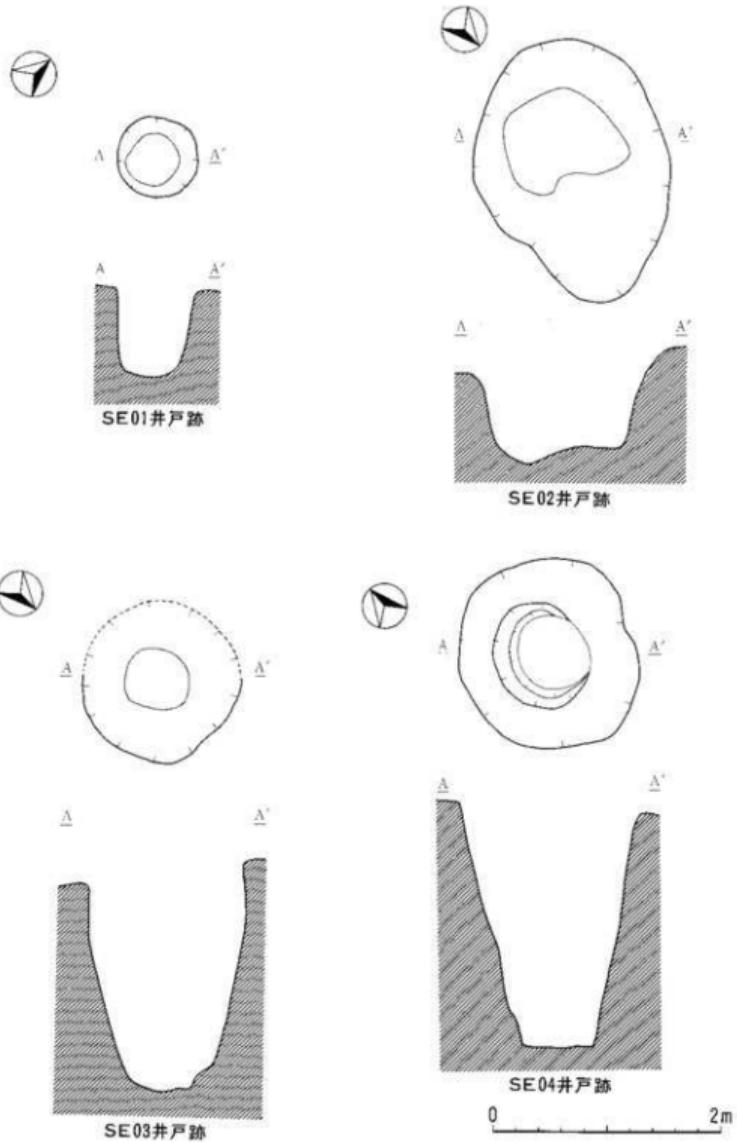
S E 11井戸跡（第27図）

調査区の中央南より、F-31に位置する。S T 09、S D 07と重複し、新旧関係はS T 09の焼土や炭化物が上に覆う形で検出されたことからS T 09より古い。また、S D 07よりは新しい。平面形はほぼ円形で、規模は上端で径1.4m×1.5m、下端で径0.92m、深さ1.98mである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。堆積土中より土師器壺、壺破片、鉄滓、炭化物、磁石？、自然石が出土した。

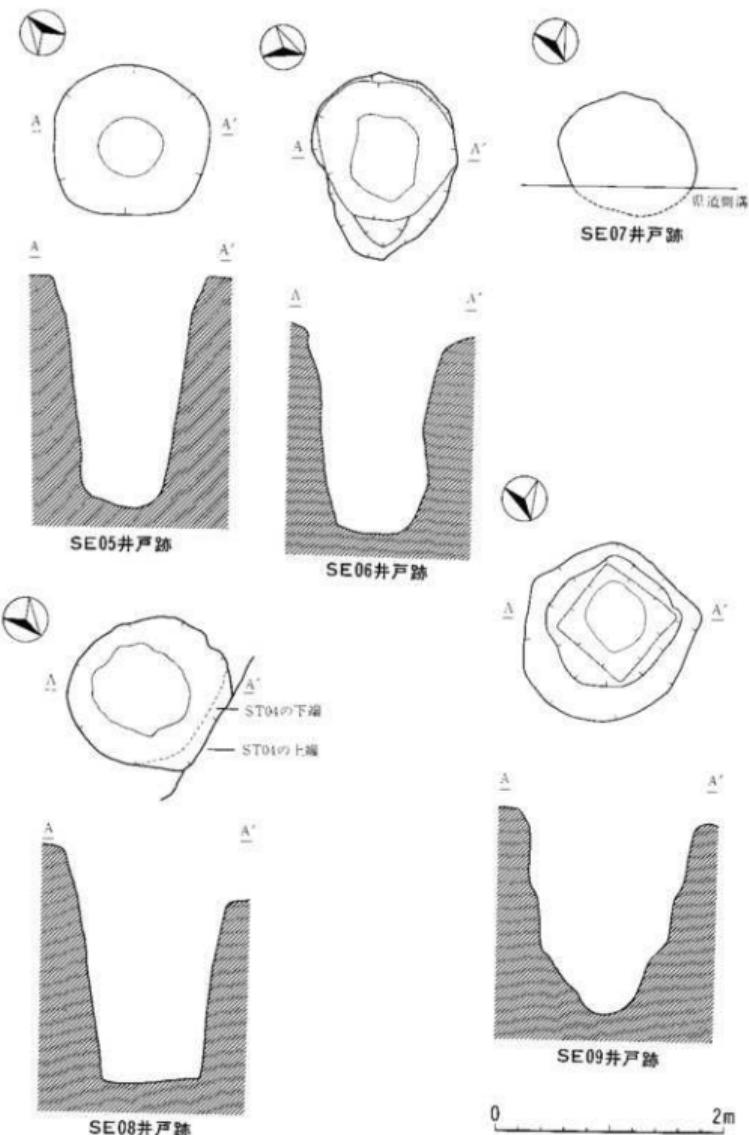
S E 12井戸跡（第27図）

調査区の中央南より、F-31に位置する。重複はない。平面形は上端はほぼ円形、中端は井戸枠の跡が方形に、下端は不整の梢円形を呈する。規模は上端で径1.08m、中端で径1.05m下端で径0.52m、深さ約1.33m、井戸枠は0.61×0.63m四方である。壁は2段階に外反する。底面はほぼ平坦である。堆積土中より動物のものと思われる骨片が出土した。市道下より検出されたため、上部は50cmほど削平されたものと思われる。

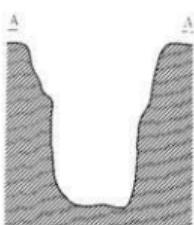
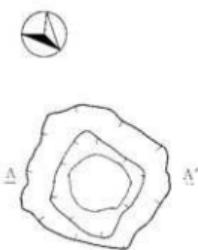
(新岡 嶽)



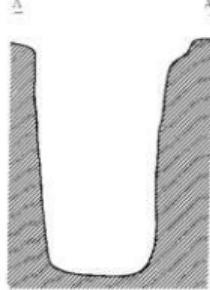
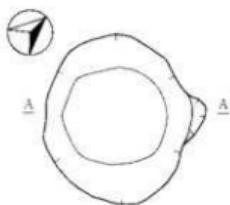
第25図 井 戸 跡 1



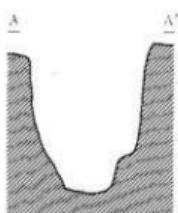
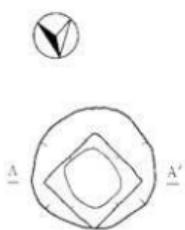
第26図 井戸跡 2



SE10井戸跡



SE11井戸跡



SE12井戸跡



第27図 井戸跡 3

第5節 焼土遺構・かまと状遺構

〔焼土遺構〕

S F I 01焼土遺構 (第28図)

G-26に位置する。重複はない。平面形と不整な楕円形で、上端で $1.26m \times 0.74m$ 、下端で $0.92m \times 0.46m$ 、深さ $0.14m$ である。長軸は東西方向である。壁はゆるやかに立ち上がり、底面はゆるやかな丸底状である。堆積土は5層に分層され、焼土、炭化物を混入する。出土遺物はない。

S F I 02焼土遺構 (第28図)

H-26・27に位置する。S F 03と重複するが、新旧関係は不明である。平面形はかなり不整な楕円形で、上端で $1.70m \times 0.92m$ 、下端で $1.52m \times 0.60m$ 、深さ $0.18m$ である。長軸は東西方向である。壁はゆるやかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。堆積土は6層に分層され、焼土、炭化物を混入する。出土遺物はない。

S F I 03焼土遺構 (第28図)

H-26・27に位置する。S F 02と重複するが、新旧関係は不明である。平面形はやや角張った楕円形で、上端で $1.40m \times (1.64)m$ 、下端で $(1.80)m \times (1.02)m$ 、深さ $0.18m$ である。長軸は東西方向である。壁はゆるやかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。堆積土は6層に分層され、焼土、炭化物を混入する。出土遺物はない。

S F I 04焼土遺構 (第28図)

H-27に位置する。重複はない。平面形は不整な楕円形を呈し、上端で $(1.68)m \times 1.00m$ 、下端で $(1.08)m \times 0.70m$ 、深さ $0.24m$ である。長軸は東西方向である。壁は階段状に立ち上がり、底面はやや傾斜がある。堆積土は6層に分層され、焼土、炭化物、ロームブロックを混入する。出土遺物はない。

S F I 05焼土遺構 (第29図)

H-26に位置する。重複はない。平面形は楕円形で、上端で $2.44m \times 1.56m$ 、下端で $1.96m \times 0.72m$ 、深さ $0.28m$ である。長軸は東西方向である。壁は直線的に立ち上がり、底面は中央部に凹凸がある。堆積土は5層に分層され、焼土、炭化物を混入する。覆土から流紋岩が出土した（写真図版参照）。

S F I 07焼土遺構（第29図）

G-24に位置する。重複はない。平面形は楕円形で、上端で(1.32)m×0.82m、下端で(1.16)m×0.72m、深さ0.09mである。長軸は南北方向である。壁は直線的に立ち上がり、底面は平坦である。堆積土は5層に分層され、焼土、炭化物を混入する。出土遺物はない。

S F I 09焼土遺構（第29図）

G-34に位置する。重複はない。平面形は方形に近い楕円形で、上端で0.81m×0.54m、下端で0.64m×0.45m、深さ0.24mである。長軸は南北方向である。壁は直線的に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。堆積土は4層に分層され、焼土、炭化物を混入する。出土遺物はない。

〔かまと遺構〕

S F II 01かまと状遺構（第30図）

G・H-32・33に位置する。S F 03と重複し、新旧関係はS F 03より古い。遺存状態は極めて不良である。検出された焚口部の平面形は不整な長方形で、焚口部は110cm×(100)cm、燃焼部底部は136cm×(44)cm、燃焼部の深さは18cmである。長軸方向は、焚口部がE-18°-Nである壁はゆるやかに内湾して立ち上がり、底面は丸底状を呈する。堆積土は7層に分層され、ローム、焼土粒を混入する。出土遺物はない。

S F II 02かまと状遺構（第30図）

G・H-32・33に位置する。S D 02と重複し、新旧関係はS D 02より新しい。遺存状態は極めて不良である。検出された焚口部の平面形は不整な長方形で、焚口部は(100)cm×70cm、深さ18cmである。長軸方向は、焚口部はN-28°-Eである。壁は内湾気味に立ち上がり、底面はややゆるくくぼむ。堆積土は5層に分層され、L、B、焼土、炭化物を混入する。出土遺物はない。

S F II 03かまと状遺構（第30図）

F・G-29・30に位置する。S F 01と重複し、新旧関係はS F 01より新しい。平面形はやや角張った不整な楕円形で、焚口部は212cm×92cm、燃焼部底部は104cm×150cm、燃焼部の深さは18cm、煙道部は60cmである。長軸方向は、焚口部がW-21°-E、煙道部がN-15°-Eである。壁は直線的に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。堆積土は4層に分層され、ローム、焼土粒を混入する。出土遺物はない。

S F II 04かまと状遺構（第31図）

G-32に位置する。段状遺構と重複し、新旧関係は段状遺構より新しい。平面形は不整な楕円形で、焚口部は160cm×(94)cm、燃焼部底部は128cm×66cm、燃焼部の深さは38cm、煙道部は64cmである。長軸方向は焚口部、煙道部ともW-18°-Sである。壁はゆるやかに外反し、底面はほぼ平坦である。堆積土は5層に分層され、L、B、ローム、焼土粒を混入する。出土遺物はない。

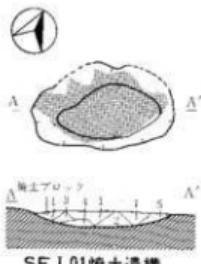
S F II 10かまと状遺構（第31図）

F・G-37・38に位置する。S B02と重複し、新旧関係はS B02より古い。また、S F11と長軸方向がほぼ一致しており、S F II 11より新しい可能性がある。燃焼部は遺存状態が極めて良好である。平面形は鍵穴状で、焚口部は144cm×70cm、開口部は(84)cm×(90)cm、燃焼部底部は120cm×120cm、燃焼部の深さは21cm、煙道部は10cmである。長軸方向は、焚口部がW-24°-S、煙道部がW-35°-Sである。壁は内湾気味に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。堆積土は7層に分層され、焼土粒、焼土ブロック、炭化物を混入する。出土遺物はない。

S F II 11かまと状遺構（第32図）

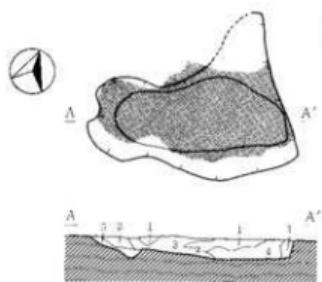
F・G-35・36に位置する。S X01段状遺構と重複し、新旧関係はS X01段状遺構より新しい。また、焚口部が削平されていることからS F II 10より古い可能性がある。東側の焚口部および西側の煙道部の遺存状態は不良である。平面形は不整な楕円形で、焚口部は104cm×136cm、燃焼部底部は72cm×124cm、燃焼部の深さは(18)cm、煙道部は52cmである。長軸方向は焚口部、煙道部ともW-22°-Sである。壁は直線的に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。堆積土は3層に分層され、ローム、焼土粒、炭化物を混入する。出土遺物はない。

(新岡 嶽)



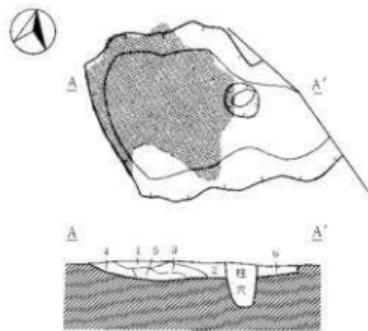
SF101 填土圖樣

第1層	褐色	下	5/6(10YR)	壤土，氧化物混入。
第2層	黄褐色	上	5/6(10YR)	壤土少量，氧化物混入。
第3層	暗黄褐色	土	5/6(10YR)	壤土少量，氧化物混入。
第4層	褐色	下	4/6(10YR)	壤土，少量，氧化物多量混入。
第5層	暗褐色	上	3/4(10YR)	壤土，从植物根茎混入。



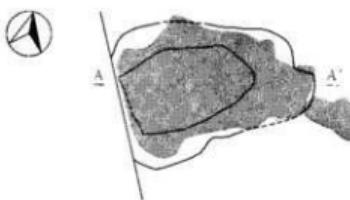
SF 102燒土遺構

第1层	褐土	上	4/6(10YR)	壤土,氯化物混入。
第2层	灰钙土	+	5/6(20YR)	壤土,深化物量混入
第3层	黄褐色	+	5/6(10YR)	壤土,氯化物混入
第4层	褐土	上	4/6(10YR)	壤土,少量,氯化物混入
第5层	明黄色沙土	+	6/6(10YR)	壤土,腐化物混入。



SFT03燒土遺構

第1番	光 色	土	4/4(10YR)	幾 多 量 化 物 質 混 入
第2番	深 色	土	4/4(10YR)	幾 少 量 化 物 質 混 入
第3番	褐 色	土	4/4(10YR)	土 中 少 量 化 物 質 混 入
第4番	褐 色	土	4/6(10YR)	土 中 多 量 化 物 質 混 入
第5番	灰 色	土	5/6(10YR)	幾 少 量 化 物 質 混 入
結果				
以上5種色土				

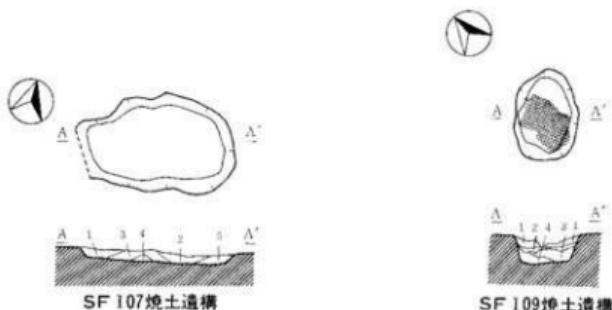
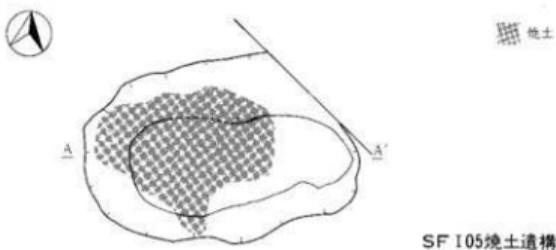


SF 104燒土遺構

第1回	魔 金 士	4/6(10YR)	魄力、魔化物語人。
第2回	魔 金 士	5/6(10YR)	魄力上アロ。力量多。
			魔化物語人。
第3回	魔 金 士	6/6(10YR)	魄力、魔化物、L-山道主。
	魔 金 士	7/6(10YR)	魄力多力量、从化物少量現人。
第4回	魔 金 士	7/6(10YR)	魄力、魔化物語人。
第5回	魔 金 士	8/4(10YR)	L-山道主。
第6回	魔 金 士	8/4(10YR)	L-山道主。



第28図 特土遺構

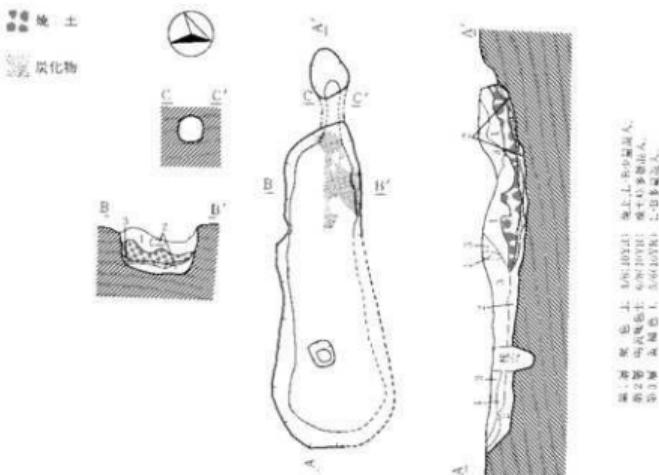


0 2m

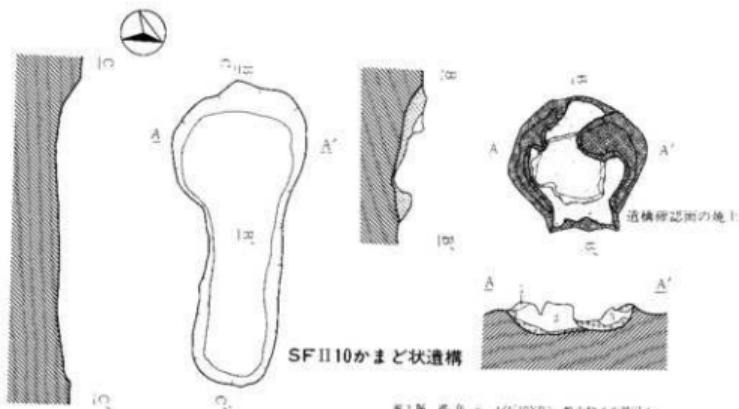
第29図 焼土遺構 2



第30図 かまど状遺構 1



SF II 04かまど状造構

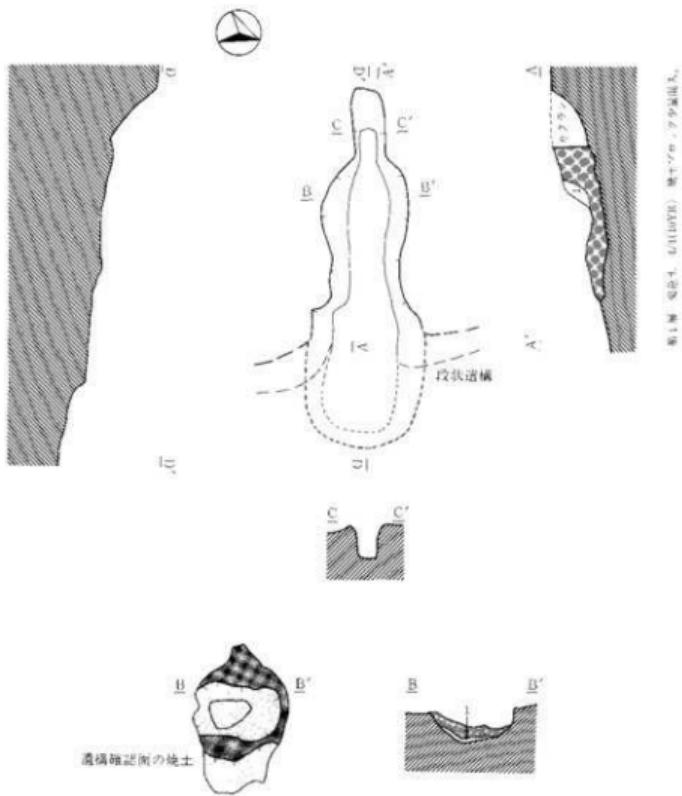


普通 地下水 : 4/4(101R) 地上和子少量注入。
炭化物 : 3/4(10VII) L-1号, 地上アリーフまたはもじり入。
鉄褐色 : 3/4(10VII) 鉄土アロード注入。

0 2m

第31図 かまど状造構 2

地図上



第1番 高利色土 (500(YR)) 砂土に混入。

SF IIIIかまと状造構

0 2m

第32図 かまと状造構 3

第6節 溝 跡

S D01溝跡（第33図）

F・G-39～42に位置する。SK02・SB03と重複し、新旧関係はSK02より古く、SB03よりは新しい。平面形は直線的に延びる。規模は、長さ(5.2)m、幅78cm、深さ22cmである。断面形は箱形である。傾斜は南→北である。堆積土は4層に分層され、各層にローム粒を含み、人為的に埋め戻された可能性が高い。出土遺物は確認面で土師器片、堆積土中から土師器片、底面から土師器片と須恵器片が出土した。南側は調査区域外へ延び、北側は県道によって削平されている。

S D02溝跡（第33図）

G・H-33～34に位置する。SF02と重複するが、新旧関係はSD02より古い。平面形はゆるい「く」字状で、両端は閉塞する。規模は長さ(9.9)m、幅30～51cm、深さ22cmである。断面形はU字形である。傾斜は西→東である。堆積土は2層に分層され、ローム粒を混入し、人為的に埋め戻された可能性が高い。出土遺物は珠州の擂鉢口縁部破片が出土した。東寄りの長さ約1m程は市道に伴う側溝により削平されている。

S D03溝跡（第34図）

F・G-33・34に位置する。SX01段状遺構と重複し、新旧関係はSX01段状遺構より新しい。平面形は直線的で、東側は閉塞する。規模は、長さ7.28m、幅114～148cm、深さ16～42cmである。断面形は箱形に近い。傾斜は西→東である。堆積土は1層で、ロームブロックが混入し、人為的に埋め戻された可能性が高い。堆積土中から土師器片4点、陶磁器片1点、炭化物、底面からは鉄滓が出土した。西側は調査区域外へ延びる。

S D04溝跡（第34図）

F-42に位置する。ST07、SK14と重複し、新旧関係はST07、SK14より新しい。平面形は直線的で、北側は閉塞する。規模は、長さ(2.76)m、幅は34～48cm、深さ24cmである。断面形はU字形である。傾斜は南→北である。堆積土は1層で、ロームブロック（大）と炭化物を多量に含み、人為的に埋め戻された可能性が高い。出土遺物はない。南側は調査区域外に延び、北側は県道により削平されている。

S D05溝跡（第35図）

F-43に位置する。S T07と重複し、新旧関係はS T07より古い。平面形は直線的である。規模は長さ約(1.84)m、幅86~110cm、深さ14cmである。断面形は箱形に近い。傾斜は南西→北東である。堆積土は1層で、ローム粒や粘土ブロックを含み、S T07をつくる際に人為的に埋め戻された可能性が高い。出土遺物はない。南側は調査区域外に延び、北側は県道により削平されている。

S D06溝跡（第35図）

F-42に位置する。S K14と重複し、新旧関係はS K14より古い。平面形は「く」字状に屈曲する規模は、長さ(2.10)m、幅は24~56cm、深さ18cmである。断面形は箱形である。傾斜は南→北である。堆積土は2層に分層され、ローム粒を混入し、自然堆積の可能性がある。出土遺物はない。南側は調査区域外に延び、北側は県道により削平されている。

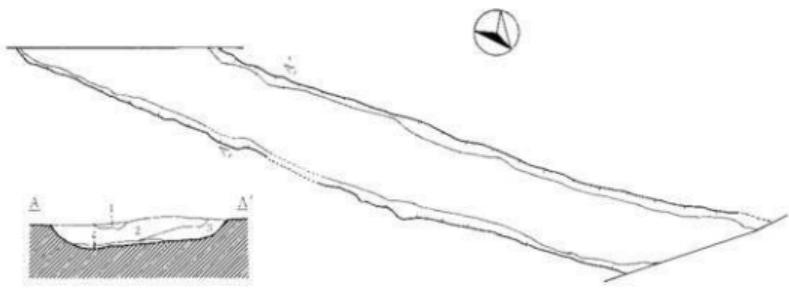
S D07溝跡（第35図）

F-30~31に位置する。S E11と重複し、新旧関係はS E11より古い。平面形はほぼ直線的で、両端は閉塞する。規模は、長さ5.04m、幅18cm、深さ8cmである。断面形は箱形である。傾斜は西→東である。出土遺物はない。

S D08溝跡（第35図）

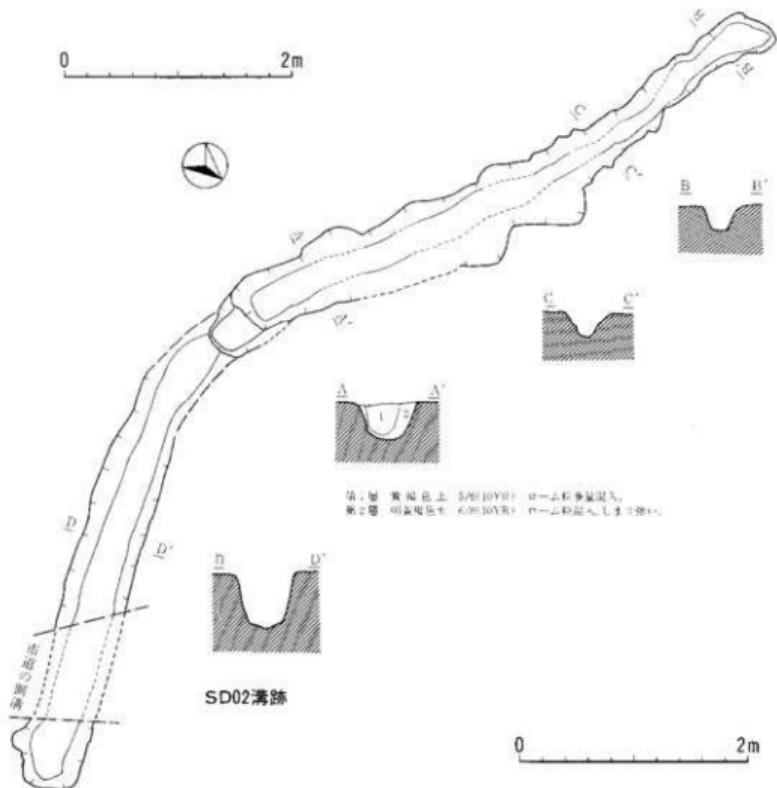
F-30・31に位置する。S K06と重複し、新旧関係はS K06より古い。平面形はほぼ直線的であり両端には土坑が付属するのかもしれない。規模は、長さ4.08m、幅22~52cm、深さ14cmである。断面形は箱形である。傾斜は南西→北東である。出土遺物はない。両端には土坑が付属するとすれば、上下の土坑が水溜的な機能を果したものとも考えられる。

(新岡 嶽)



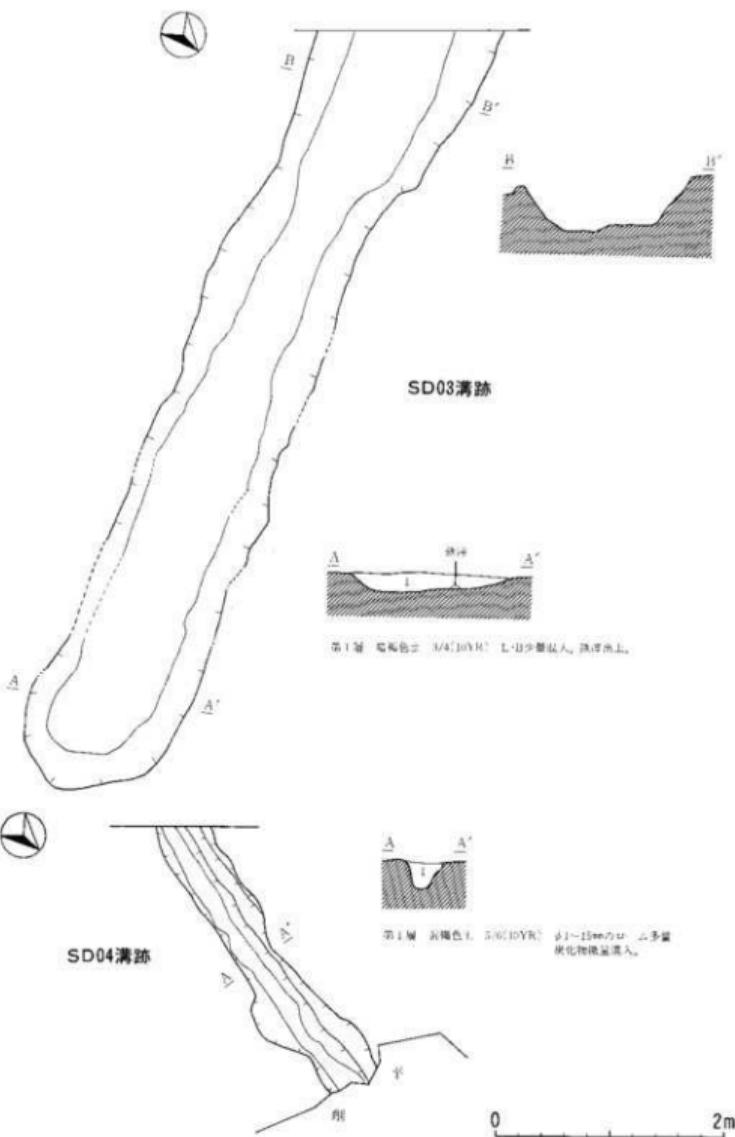
第1層 黄褐色土 3.0(10YR) □—1種微量混入。
第2層 黄褐色土 3.0(10YR) L—0少量混入。
第3層 黄褐色土 3.0(10YR) L—B多量混入。
第4層 黄褐色土 3.0(10YR) L—B多量混入。

SD01溝跡

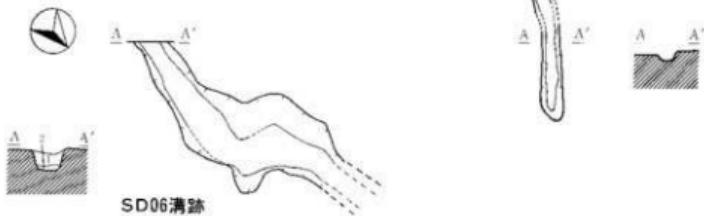
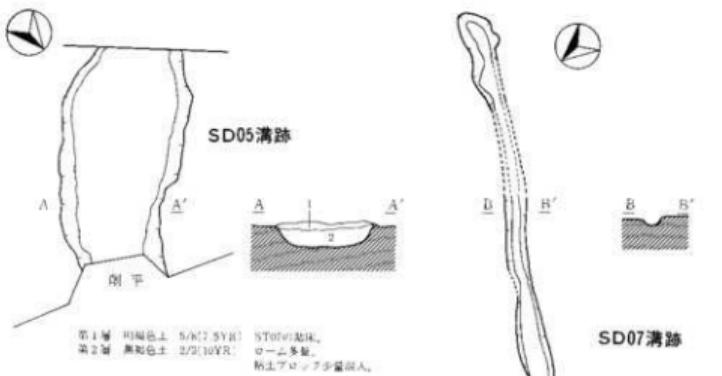


第1層 黄褐色土 3.0(10YR) □—2種微量混入。
第2層 明灰色土 6.0(10YR) □—2種混入しません。

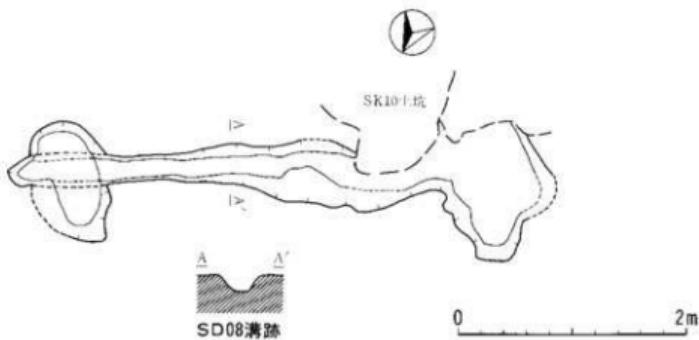
第33図 溝 跡 1



第34図 溝 跡 2



第1層 黄褐色土 5/6(10YR) 岩色土、木炭微量、植物根少量混入。
第2層 黑褐色土 3/3(10YR) 黑褐色ローム少量混入。



第35図 溝 跡 3

第7節 その他の遺構

S X01段状遺構（付図）

〔位置〕 F・G-34～39に位置する。

〔重複〕 S D03、S F10、S T08、S T10、S T02、S B03と重複する。新旧関係はS D03、S F10、S T08、S T02、S B03より古く、S T10より新しい。また、F-35付近で擾乱を受けている。

〔規模〕 南東から北西にかけて直線的に続き、長さ上端で約27mを計る。

〔断面形〕 東側から西側にかけてゆるやかに傾斜して立ち上がる。

〔堆積土〕 炭化物、ローム粒を含む。自然堆積の様相を示す（第36図）。

〔出土遺物〕 本遺構に伴うと判断される遺物は出土しなかった。

〔その他〕 調査区域の西側の森林の中にも本遺構と同様の数段の段が見られる。このことから本遺構は、西から東にゆるやかに傾斜する地形を平らに整地するために築かれたものと考えられる。また、すぐ東側に位置するS B01、S B02、S B08掘立柱建物跡の軸方向と本遺構は平行である。よって上記の掘立柱建物跡は本遺構に伴う可能性が高いと思われる。

S X02 炭化物土坑1（第37図）

F-41・42に位置する。S D04、S D06、S K15と重複し、S D06よりは新しく、S D04、S K15よりは古い。西側が調査区域外に延びるため、全体の形や規模は不明である。検出された部分は、不整な梢円形で、上端で(3.08m)×(1.94m)、下端で(2.84m)×(1.62m)、深さ0.34mである。壁はゆるやかに立ち上がる。底面は階段状で凹凸がある。堆積土は4層に分層された。ローム粒を混入し、とりわけ第3層は炭化物がびっしりつまっている。しまりがなく人為的に埋め戻された可能性が高い。第3層の厚さは0.10m、幅3.08mである。確認面、堆積土中および底面から土師器皿（かわらけ）の破片が出土した。壁や底面に焼土もなく、炭窯跡等というより、炭化物をある一定の時期に廃棄した場所と思われる。

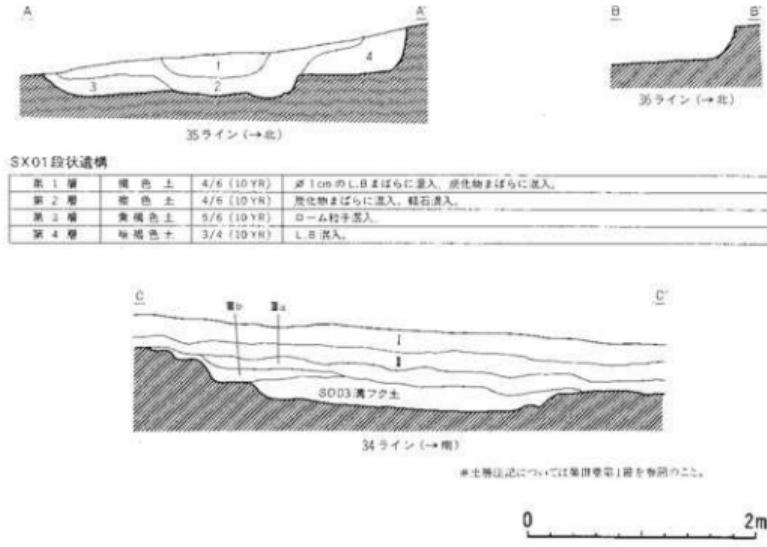
S X03 炭化物土坑2（第38図）

F-40～42に位置する。S K14と重複し、S K14より新しい。西側が調査区域外に延びるため、平面形は全体の形や規模は不明である。検出された部分は不整な梢円形で、上端で(1.23)m×(0.9)m、下端で(0.8)m、深さ0.35mである。壁はゆるやかに立ち上がる。底面は不明である。堆積土は3層に分層された。炭化物層の厚さは0.15m、幅5.15mである。ローム粒、炭化物を少量混入し、しまりがないことから人為的に埋め戻されたと思われる。出土遺物はな

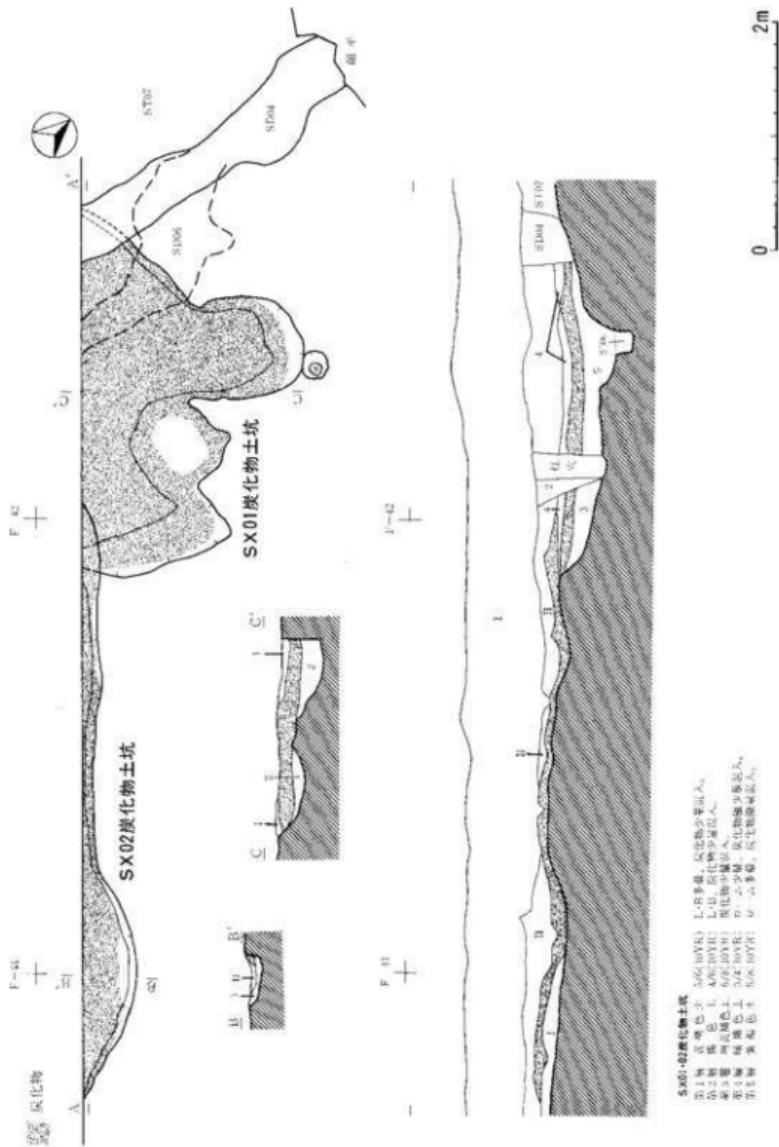
い。

壁や底面に焼土もなく、炭窯跡等というより、炭化物をある一定の時期に廃棄した場所と思われる。

(新岡 嶽)



第36図 段状遺構



第37圖 磷化物土坑

第VI章 出土遺物

内真部(4)遺跡からは、段ボール箱にして13個分の遺物（木製品を除く）が出土した。各種の遺物は遺構の内外から出土しているが、そのほとんどが細片であり、完形品や復元されたものは全体の遺物量に比較してもごく僅かである。

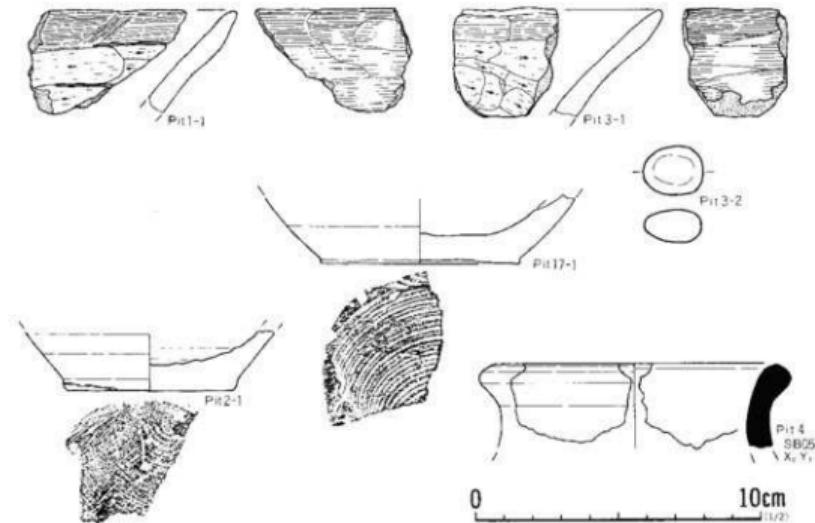
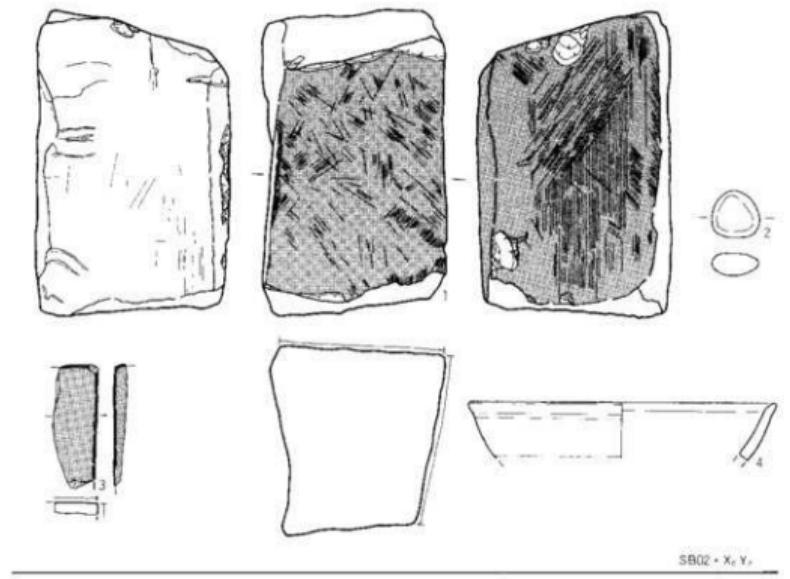
遺構内からは多種にわたる遺物が出土している。しかし細片が多く、それも覆土中からのものがほとんどであるため、遺構の年代を確実に決定し得る遺物は皆無に等しいことから、遺物と遺構との関連、遺物相互の関連といったものは極めて不安定なものである。

遺構外の遺物は、調査区の全域、主として第II層から出土している。時代的には縄文時代を除くと古代から近代までのものである。細片が多く、しかも同一層位内で年代のかけ離れるものが混在した状態で出土している。特に土器類は細片が多く、同一層位内で年代のかけ離れるものが混在する状態は、ほぼ同時期の他の遺跡にも該当することはあるが、やはり古代から近代にかけての断続的な人間活動の結果をよく示しているといえる。

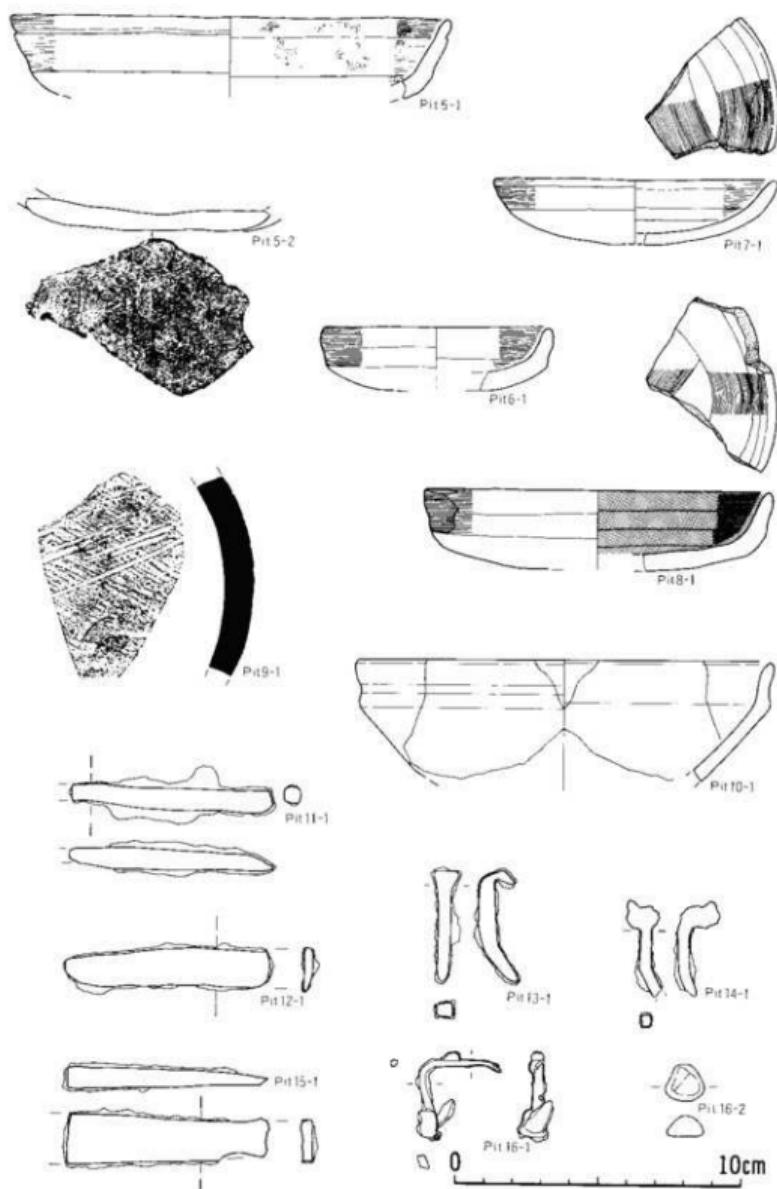
特に集中して遺物が出土した地点は、湧水地区に設定したトレンチ（第2図参照）である。湧水が激しいためもあってかここから出土した土器類は摩滅が著しい。しかしながら遺構の集中している地域の包含層から出土するものよりも破片は大きく、むしろ後世の擾乱は免れているようである。なお、トレンチからは近世以降の遺物と木製品は出土していない。

遺構内、遺構外から出土した断片的な資料のみでは年代の確実な把握はできないため、分類は材質での大別を先ず行った。土器をI群、陶磁器をII群、鉄製品をIII群、銅製品をIV群、木製品をV群、石製品をVI群、その他の材質のものをVII群とした。さらに機能面での細分として食器具を1類、調理具を2類、貯蔵具を3類、暖房具を4類、灯明具を5類、喫茶具を6類、文具を7類、武具を8類、生産具を9類、建築具を10類、その他を11類とし、出土遺物に関する記載観察表にまとめた。

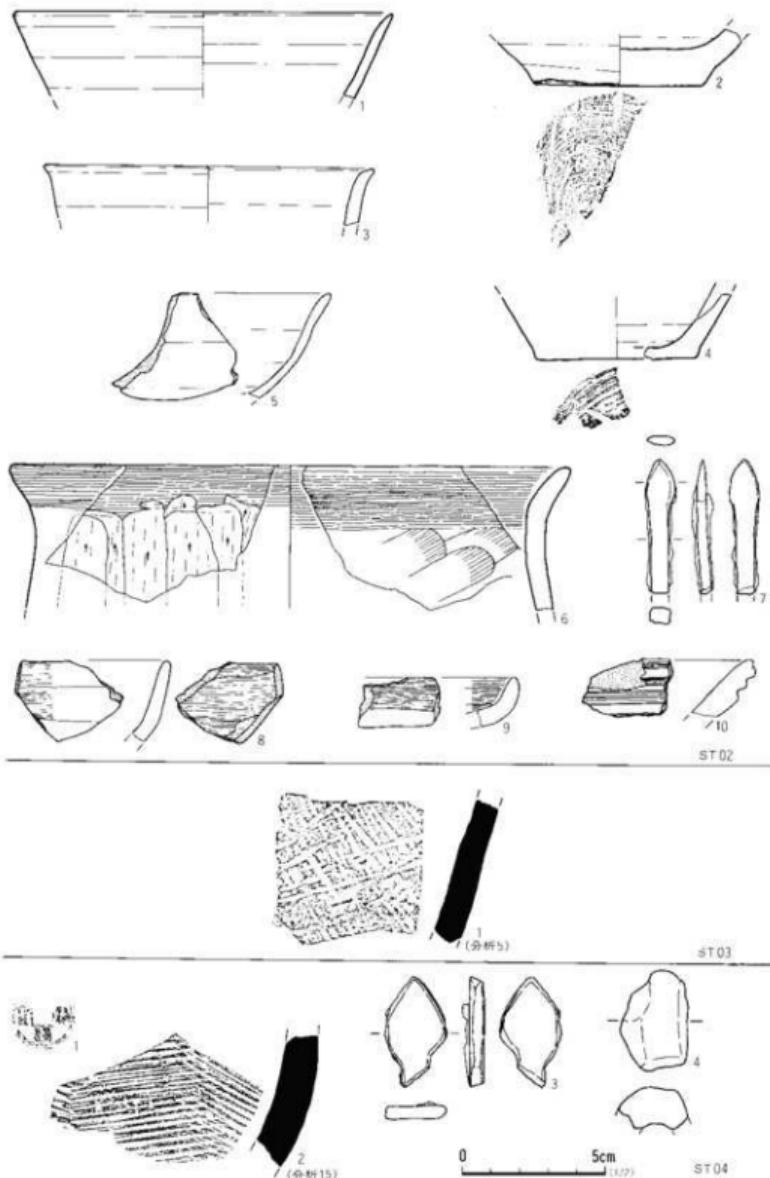
（木村 高）



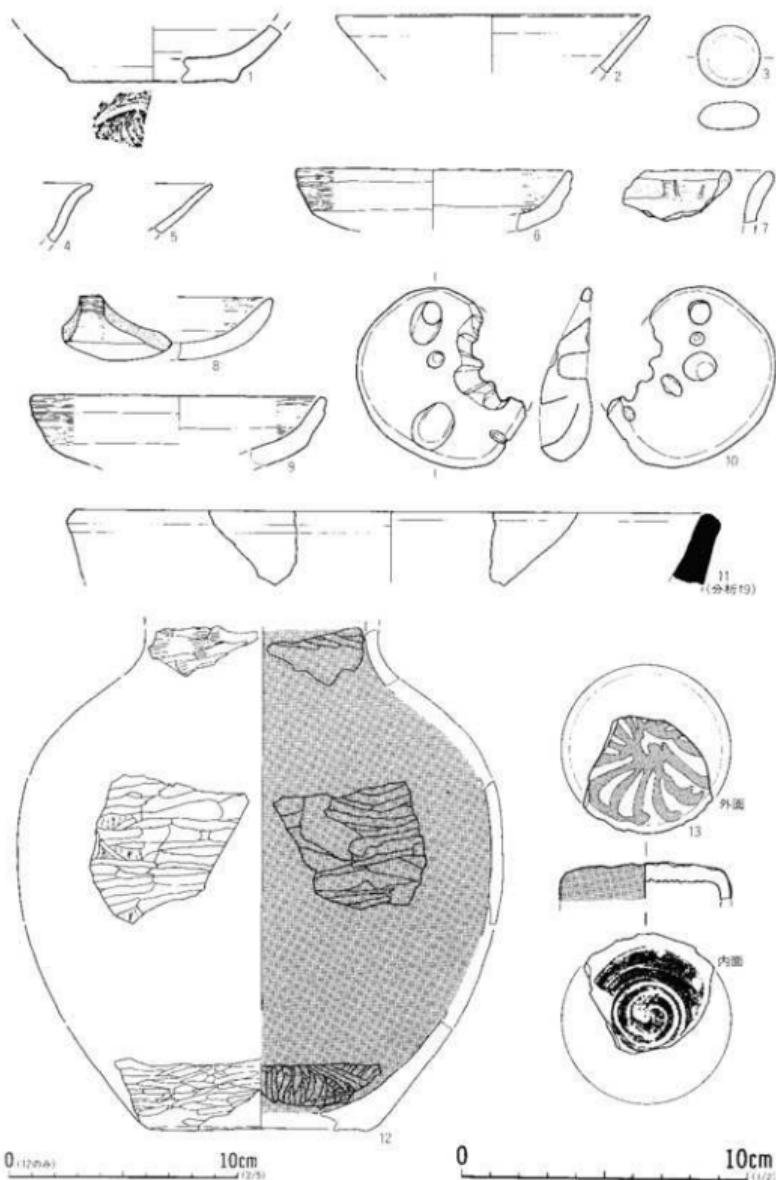
第38図 SB02・Pit出土遺物



第39図 Pit出土遺物



第40図 ST02, ST03, ST04出土遺物



第41図 ST06出土遺物